



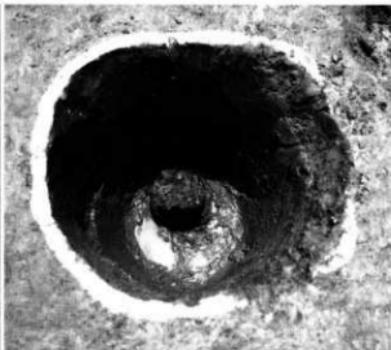
S E 306(北から)



S E 311遺物出土状況(南から)



S E 311木器(153~155) 出土状況(北から)



S E 312(北から)



S D 301北部遺物出土状況(南西から)



S D 311中部遺物出土状況(南西から)



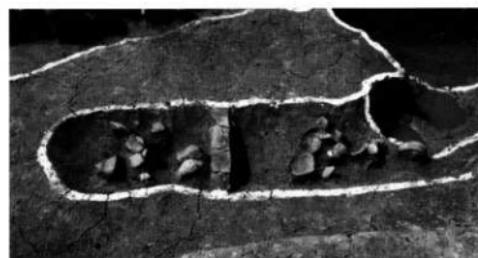
S K312(南東から)



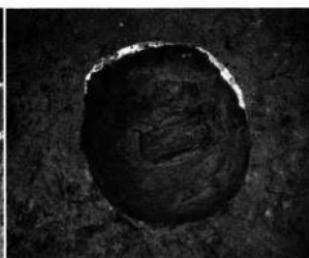
同上(北東から)



同細部(東から)



S K314(南東から)



S P338(南西から)

圖版 10
出土遺物



6



11



8



12



13



9



14



10



15



16



34



17



35



18



51

S I 201(16~18)、S E202(34・35)、S I 301(51)

圖版 12
出土遺物



68



69



74



75



79



80

SE 301(68・69)、SE 302(74)、SE 303(75・79・80)

圖版 13
出土遺物



S E 303

圖版 14
出土遺物



101



109



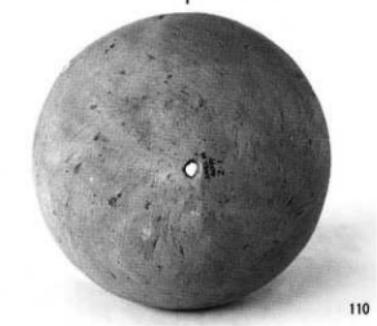
102



|



106



110

S E 303(101・102・106・109)、S E 305(110)



114



123



115



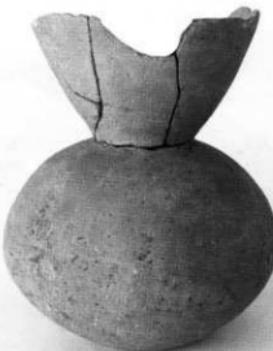
124



116

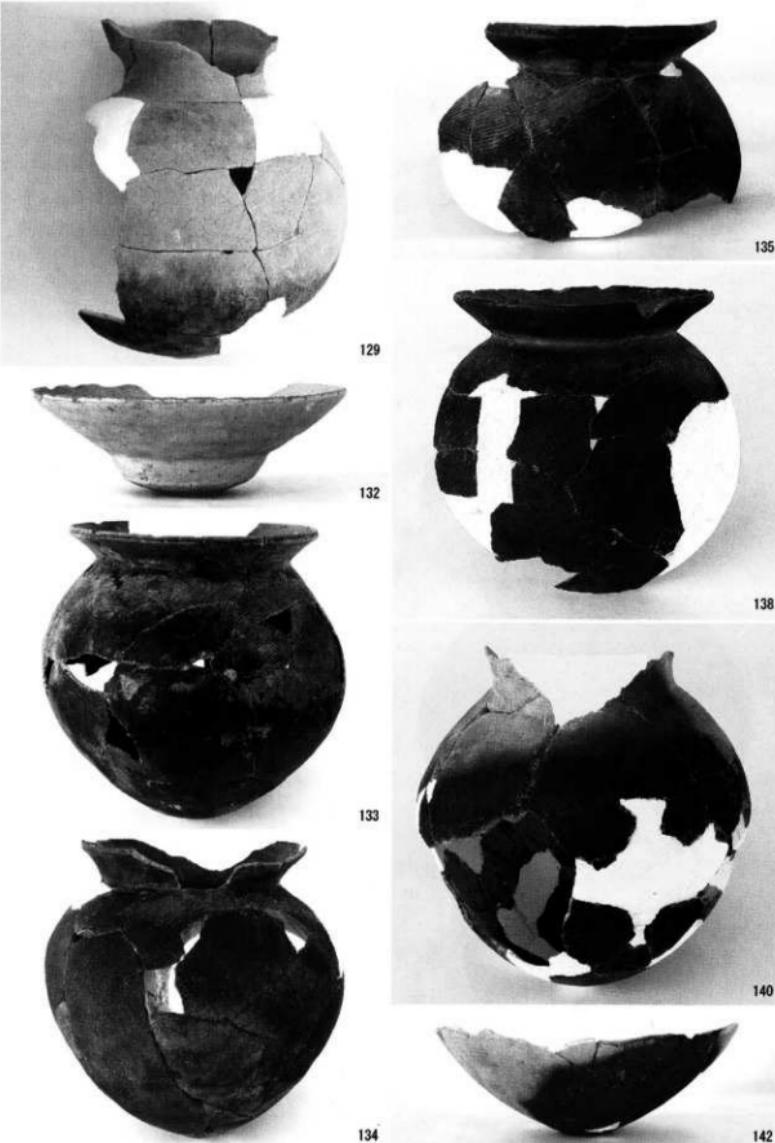


121

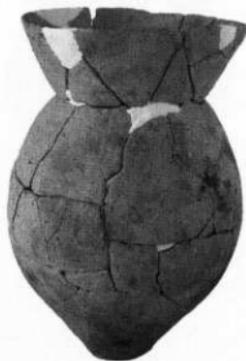
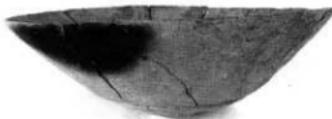
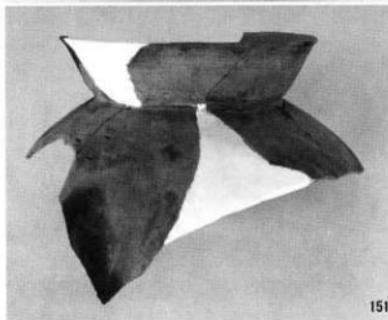
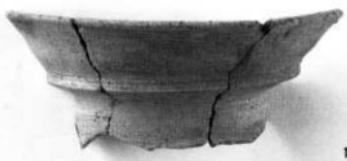


127

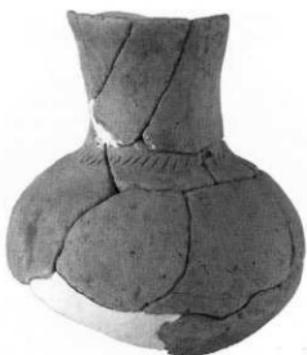
S E305(114~116)、S E306(121・123)、S E307(124)、S E309(127)



S E 309(129・132～135)、S E 310(138・140・142)



SE 311(145・150~152)、SE 312(159)、SK 310(162)、SK 311(163)



164



172



174



165



171



178



175

SK314(164・165)、SK312(171・172・174・175・178)

図版 19
出土遺物



179



180



181



180



181



183



184

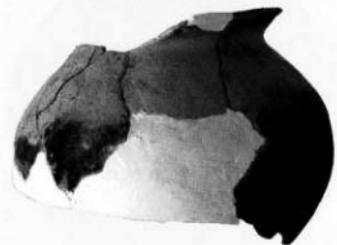
S K312



187



188



189



190



191



193



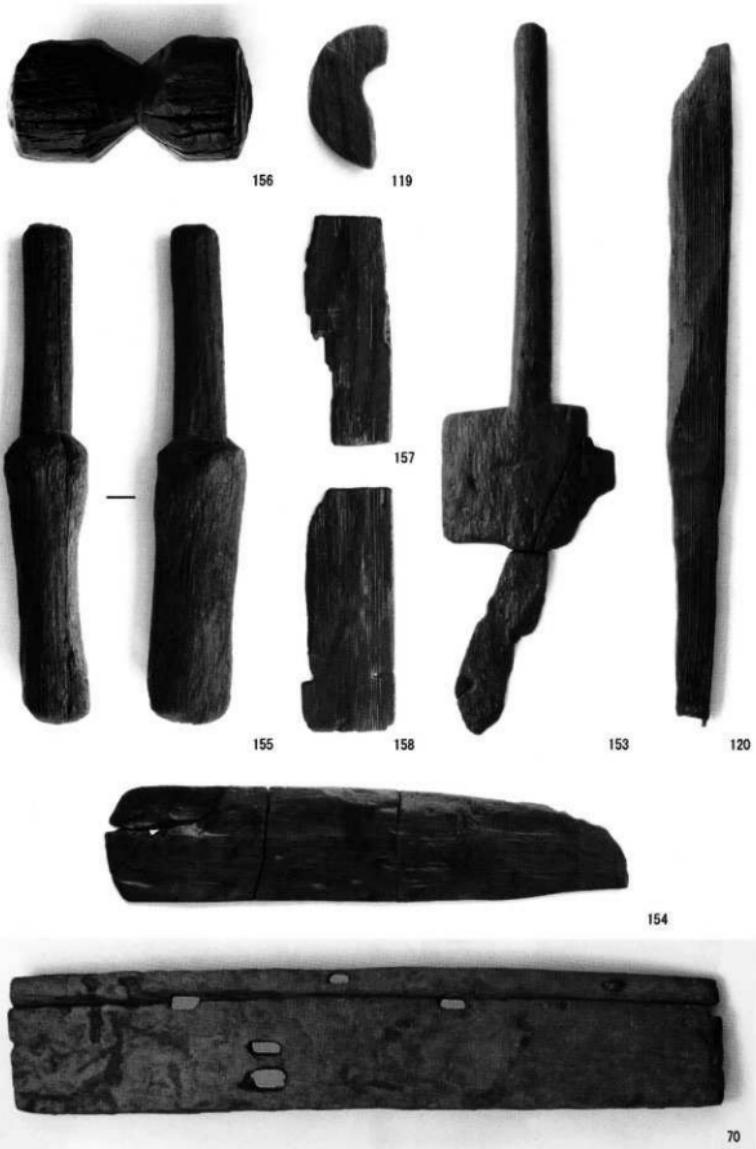
207

S K312(187~189)、S D301(190・193・194・207)



S D 301(198・201・202・205・206)、S D 322(209)

図版22
出土遺物



S E 301(70)、S E 305(119・120)、S E 311(153～158)

III 久宝寺遺跡第18次調査（K H94-18）

例　　言

1. 本書は、大阪府八尾市神武町143. 144. 145. 146. 146-2. 170. 172. 173. 174. 175で実施した配送センター建築工事に伴う久宝寺遺跡第18次調査(KH94-18)の発掘調査報告書である。
1. 本調査は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財調査指示書に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が株式会社サトーセンから委託を受けて実施したものである。
1. 調査は当調査研究会 坪田真一が担当した。
1. 現地調査は、平成6年9月1日に着手し、同年10月12日に終了した。調査面積は約810m²である。
1. 現地調査には、大見康裕・川崎晃男・濱田千年・山内千恵子の参加を得た。
1. 内業整理は下記が参加し、現地調査終了後に着手して平成20年8月31日をもって終了した。
　　遺物復元－岩本順子・都築聰子・濱田・山内
　　遺物実測－田島和恵・山内
　　遺物トレース－市森千恵子
　　遺構デジタルトレース－鈴木裕治・坪田
　　遺物写真撮影・遺物図版作成－木村健明・坪田
　　その他－梶本潤二・田島宣子
1. 本書の執筆及び編集は坪田が行った。

本文目次

第1章 はじめに.....	75
第2章 調査概要.....	76
第1節 調査方法.....	76
第2節 基本層序.....	77
第3節 検出遺構と出土遺物の概要.....	77
第3章まとめ.....	99

挿図目次

第1図 調査地位置図.....	75	第16図 S K202~205出土遺物.....	85
第2図 地区割り図.....	76	第17図 S K206平断面図.....	86
第3図 基本層序.....	76	第18図 S K206出土遺物①.....	87
第4図 S D101・S D201北壁断面図.....	77	第19図 S K206出土遺物②.....	88
第5図 第1面平面図.....	78	第20図 S K207平断面図.....	89
第6図 第2面平面図.....	79	第21図 S K207出土遺物.....	90
第7図 S I 201平面図.....	80	第22図 S D201出土遺物①.....	92
第8図 S I 201出土遺物.....	80	第23図 S D201出土遺物②.....	93
第9図 S E 201平断面図.....	81	第24図 S D201出土遺物③.....	94
第10図 S E 201出土遺物.....	81	第25図 S D201出土遺物④.....	95
第11図 S K201平断面図.....	82	第26図 S D201出土遺物⑤.....	96
第12図 S K202平断面図.....	82	第27図 S D201出土遺物⑥.....	97
第13図 S K201出土遺物.....	83	第28図 S D202出土遺物.....	98
第14図 S K203平断面図.....	84	第29図 溝群、包含層出土遺物.....	99
第15図 S K204平断面図.....	84	第30図 韓式系土器.....	100

図版目次

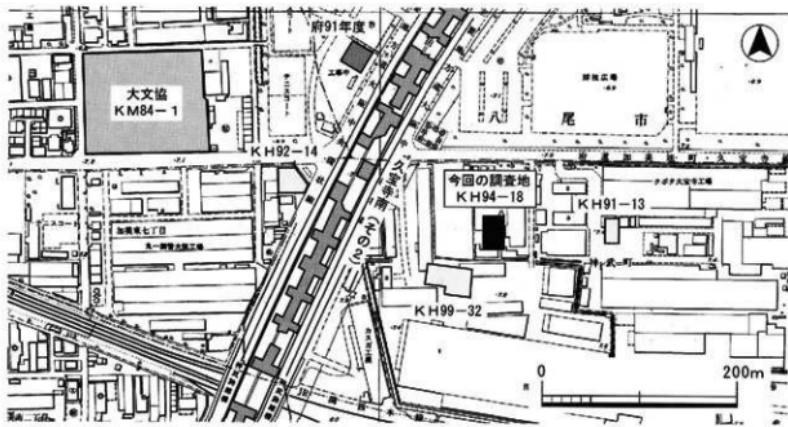
- 図版1 第1面(北から)
SD101・201北壁
- 図版2 第2面(北から)
- 図版3 S I 201(西から)
同P1～P4
- 図版4 S E 201(南から) S K201(北東から)
SK202上面遺物出土状況(西から) SK202(南西から)
SK203(南東から) SK204(北西から)
- 図版5 SK206(北から) SK206東壁土器(29)出土状況
SK207上面遺物出土状況(南から) SK207(南東から)
SD201中央付近遺物出土状況(北東から) SD201内臼(185)出土状況(北東から)
- 図版6 SD201(北西から)
溝群(東から)
- 図版7 S I 201、S E 201、SK201・202出土遺物
- 図版8 SK202・203出土遺物
- 図版9 SK204・206出土遺物
- 図版10 SK206・207出土遺物
- 図版11 SK207出土遺物
- 図版12 SD201出土遺物
- 図版13 SD201出土遺物
- 図版14 SD201出土遺物
- 図版15 SD201出土遺物
- 図版16 SD201出土遺物
- 図版17 SD201出土遺物
- 図版18 SD201出土遺物
- 図版19 SD201出土遺物
- 図版20 SD201出土遺物
- 図版21 SD202、溝群、包含層出土遺物

第1章 はじめに

久宝寺遺跡は八尾市の西端に位置し、現在の行政区画によると、八尾市内では北久宝寺・久宝寺・西久宝寺・南久宝寺・神武町・北龜井町・龍華町・渋川町、さらに西の大阪市域、北の東大阪市域に広がっている。地理的には旧大和川の主流である長瀬川の左岸にあたり、同地形上で南側に跡部遺跡・龜井遺跡・太子堂遺跡が存在する。

当遺跡発見の契機は、昭和10年に八尾市久宝寺5丁目で行われた道路工事の際に、弥生土器・土師器・丸木船の残片が出土したことによる。昭和48年度には、大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センターによる近畿自動車道天理～吹田線関連の総延長13.5kmに及ぶ発掘調査が開始され、このほぼ中位に位置する久宝寺遺跡は、北地区・南地区に分割され、昭和55年度から昭和61年度にわたって調査が実施された。また・東大阪市文化財協会・八尾市教育委員会・当調査研究会においても多次にわたる発掘調査が実施されている。これらの調査成果から、当遺跡は縄文時代晚期～近世にわたる遺跡であることが確認されている。

このような情勢下の平成6年、八尾市神武町143.144.145.146.146-2.170.172.173.174.175における配送センター建築工事の届出書が、八尾市教育委員会文化財課に提出された。これを受けた同文化財課では、当該地が周知の遺跡範囲内にあたることから、平成6年5月10日に遺構確認調査を実施した(久宝寺遺跡94-65)^{註1}。その結果、古墳時代前期の遺物包含層が確認され、同文化財課では発掘調査が必要であると判断し、事業者にその旨を通知した。そして、発掘調査を実施することが両者で合意され、調査にあたっては、事業者・文化財課・当調査研究会の三者協定により、当調査研究会が主体となって実施することとなった。



第1図 調査位置図

第2章 調査概要

第1節 調査方法

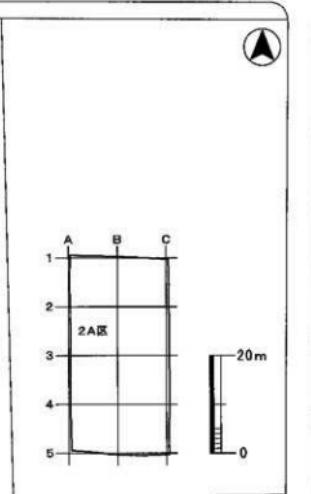
今回の調査は配送センター建築工事に伴う調査で、当調査研究会における久宝寺遺跡内での第18次調査(KH94-18)にあたる。

調査にあたっては、市教委による埋蔵文化財調査指示書に基づき、現地表下1.7~1.8mまでを機械掘削とし、以下の約0.3mを人力掘削により実施した。

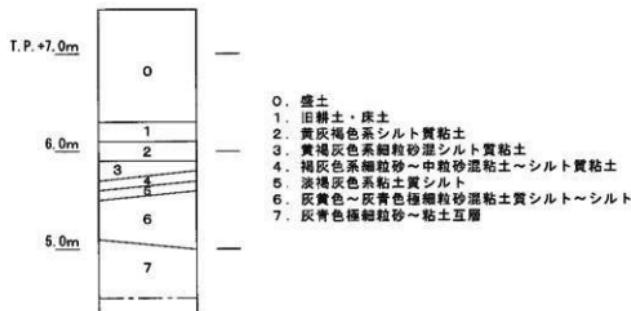
地区割については、調査区平面形に合わせて10m方眼を任意に設定した。そして南北ラインにアルファベット(西からA~C)、東西ラインに数字(北から1~5)を冠し、10m四方の地区名は北西交点のポイント(1 A~4 B)に代表させた。なお1/2500地図との合成によると、この南北ラインは座標北から西に約0.4度振っている。

調査で使用した標高の基準値は、調査地北東約900mに所在する[頭恵寺]境内に設置されている府水準点(T.P.+9.38m)より移動したものである。

←府道加美旭町・久宝寺線→



第2図 地区割り図



第3図 基本層序

第2節 基本層序

調査地の現地表面はT.P.+7.2~7.3mを測る。第0層は盛土で層厚約1.1mを測る。第1層は旧耕土、及びその床土である。第2層は近世陶磁器を含んでおり、この頃の作土層と考えられる。第3層からは機械掘削の際、時期不明の漆器碗片が出土している。第4・5層は土壤化層で、古墳時代初頭~前期の包含層である。T.P.+5.7~5.8mを測る第4層上面が第1面である。第6層以下は水成層で、周辺の調査と同様河川堆積と考えられ、遺物は出土しなかった。第5・6層上面が第2面(T.P.+5.4~5.7m)で、北東部が高くなっている。

第3節 検出遺構と出土遺物

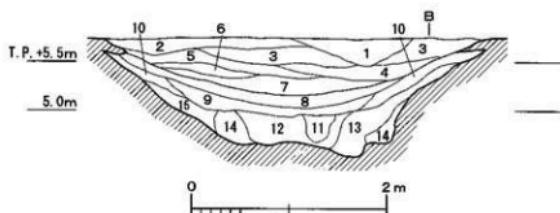
調査では第1・2面の2面を確認した。

〈第1面〉

T.P.+5.7~5.8mを測る第5層上面で、溝2条(S D101・102)を検出した。

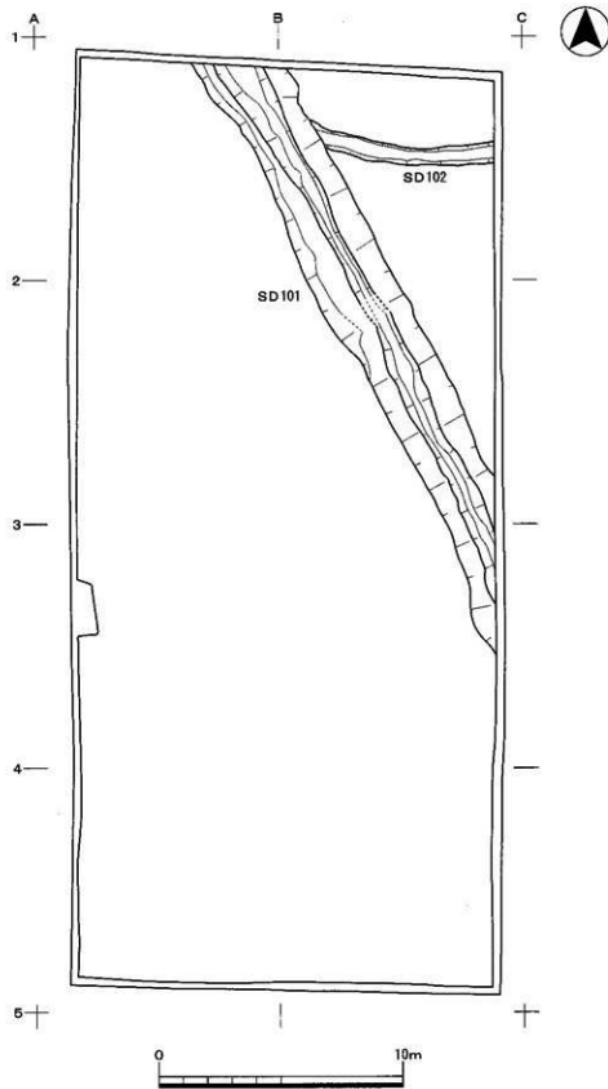
S D101 (S D201)

調査地北東部を北西~南東方向に直線的に伸びる溝で、方向は北-28度-西である。規模は検出長約27.4m・幅3.0~3.5m・深さ約1.0mを測る。底部のレベルからみて南から北への流路方向が考えられる。埋土は大きく上下2層に分けられる。上層(1~7層)は断面皿状を成し、砂~シルトを基調とする互層状で、概ね流水堆積と捉えられる。下層(8~15層)は断面逆台形を呈し、褐灰色系の粘土~シルト(植物遺体含む)の互層状で滞水堆積である。なお上層の砂層のオーバーフローによると考えられる堆積が、調査区の南部で認められる。断面の状況からみて第6層上面の第2面において機能しており、S D101は第2面 S D201の最終段階の堆積部分に当たる。遺物は主に下層(S D201)から出土しており後述する。

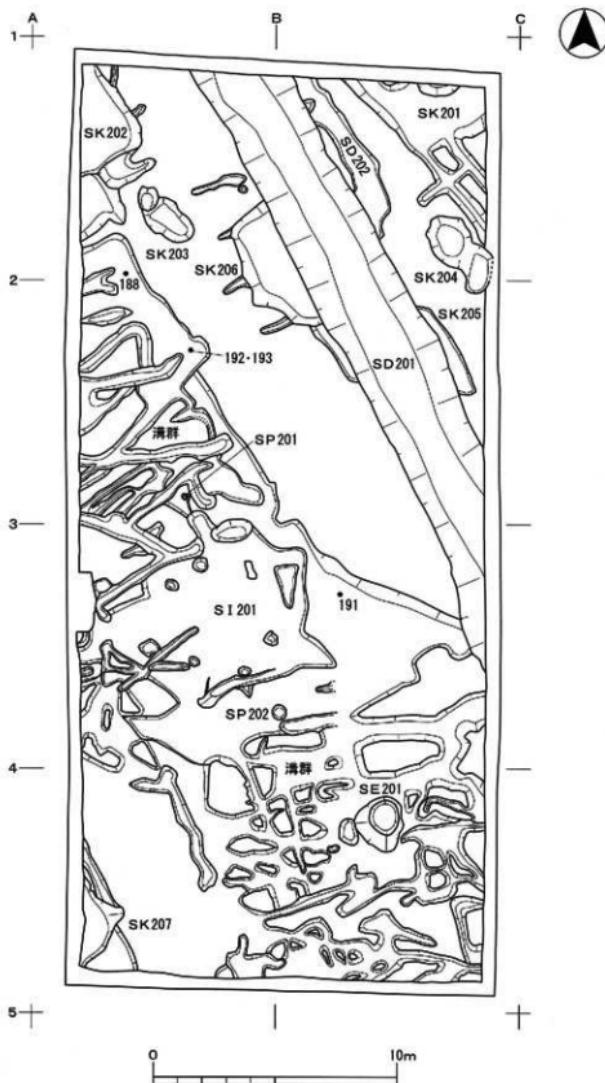


- | | |
|-------------------------|-----------------------|
| 1. 黄褐色細粒砂～粗粒砂互層 | 9. 褐褐色粘土 植物遺体 |
| 2. 黄褐色細粒砂混粘土 | 10. 褐褐色細粒砂混シルト |
| 3. 淡褐色細粒砂混粘土質シルト | 11. 褐色シルト 植物遺体 |
| 4. 灰黄色細粒砂～粗粒砂互層 | 12. 褐褐色粘土質シルト 植物遺体 |
| 5. 淡灰褐色細粒砂～粘土質シルト互層 | 13. 褐灰色細粒砂混シルト 炭 植物遺体 |
| 6. 灰黄色細粒砂 | 14. 淡褐色細粒砂混シルト 植物遺体 |
| 7. 淡灰色シルト～極細粒砂互層 植物遺体 | 15. 青灰色細粒砂混シルト |
| 8. 褐灰色粘土質シルト～シルト互層 植物遺体 | |

第4図 S D101・S D201北壁断面図



第5図 第1面平面図



第6図 第2面平面図

S D 102

東西方向のやや湾曲する溝で、西部ではS D 101と合流している。検出長約7.5m・幅約0.7m・深さ約25cmを測る。断面逆台形～方形を成し、埋土は上層が明褐色細粒砂混シルト、下層が流水堆積を示す淡灰褐色細粒砂～粗粒砂である。検出状況からS D 101への排水機能をもつ溝と考えられる。遺物は出土していない。

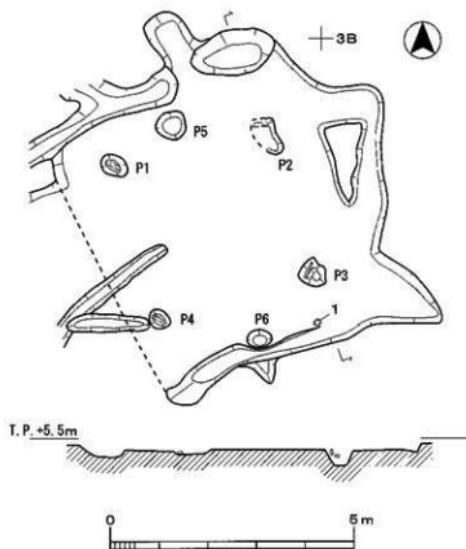
〈第2面〉

T.P.+5.4～5.7mを測る第6・7層上面で、堅穴住居1棟(S I 201)・井戸1基(S E 201)・土坑7基(S K 201～207)・溝2条(S D 201・202)・ピット2個(S P 201・202)を検出した。第2面はベース面が調査区中央から南・西に向かって落ち込む状況で、低い部分ではS I 201やS E 201の他、複雑に入り組んだ多数の溝(溝群)が検出された。

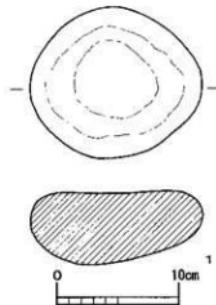
S I 201

3A区で検出した堅穴住居である。主軸は北-21°-西である。当初は堅穴住居とは認識しておらず、方形に並ぶ柱穴と、溝群の一部と捉えていた周囲の溝が壁溝状に復元できることから、合わせて堅穴住居と考えた。壁溝は北辺・南辺で確認できるのみであるが、南北約6.5m・東西約5.5mの規模が想定できる。ピットは床面で6個(P1～6)検出され、規模は径38～80cm・深さ9～30cmを測り、南北に長い六角形に配置されている。このうち主柱穴と考えられる4個(P1～4)には、長さ30cm・幅10cm・厚さ5cm程度の礎板が遺存しており、これらの柱間距離は約3.2mを測る。壁溝は幅20～25cm・深さ10cm程度を測る。床面西部から南西方向に伸びる溝は排水溝の可能性がある。

遺物は床面南部、南壁溝肩付近から磨り石(1)が出土している。法量は長辺14.7cm・短辺12.9cm・厚さ5.0cmを測る。片面の中央が浅く窪み平滑になっている。



第7図 S I 201平面図



第8図 S I 201出土遺物

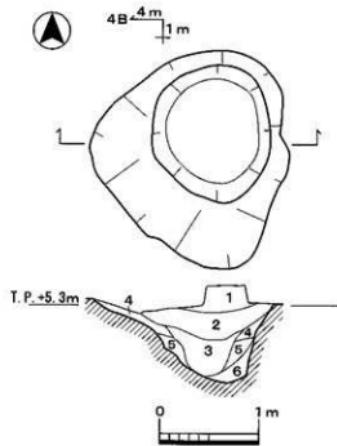
S E201

4B区で検出した素掘りの井戸である。平面不定形で、規模は南北約2.2m・東西約2.0m・深さは最大約1.0mである。断面逆台形を呈し、埋土は6層から成る。1層はブロック状で埋め戻しの際の埋土、2~6層は自然堆積層である。埋土の状況からみて4~6層埋没後に掘り直されている。

遺物は古墳時代初頭の土器が出土しており、2~6を図化した。2は口径18.6cmを測る広口壺である。形態的に四国東部からの搬入品と考えられる。3・4は庄内式壺である。5は平底、6は丸底の鉢である。5は口径10.3cm・器高6.6cmを測る。調整は外面横方向のヘラミガキ、内面ヘラケズリ後下から上の板ナデである。6は磨耗のため不明瞭であるが、外面にわずかにヘラミガキが認められる。底部に黒斑を有する。共に搬入品であろう。

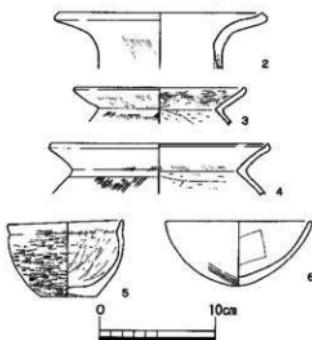
SK201

調査区北東角1B区で検出した土坑である。北・東部は調査区外に続き全体の形状等は不明である。規模は東西6.0m以上・南北2.0m以上を測る。底は南部ではほぼ平坦であるが、北に向かって下がり凹凸が見られ、深さは最大約60cmを測る。埋土は北壁で8層から成り、この内最下層に当たる7層がブロック状を呈する。これより上層は粘土シルトを基調とする自然堆積層で、ラミナ状に炭を含む層が見られる。なお南に接続する溝状部分との関係は不明である。遺物は古墳時代初頭の土器が出土しており、7~9を図化した。南部からはほぼ完形の二重口縁壺(7)が出土している。口縁部は南の溝状部分に遊離しているが、体部は土圧で押し潰された状況である。土器壺であった可能性があり、その場合当遺構が古墳周溝の角部分に当たるとも考えられよう。7は口径23.0cm・器高61.2cm・体部最大径46.6cmを測る大形品である。調整は磨耗の為不明瞭であるが、口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ、内面ヘラケズリで、体部外面中位にはタタキが認められる。色調は橙色で、底底部外面に黒斑を有する。搬入品であろう。8はハの字に開く台脚を有する底部である。摩滅のため調整が明確ではないが、内面ヘラケズリで、外側にハの字に開く台脚がある。

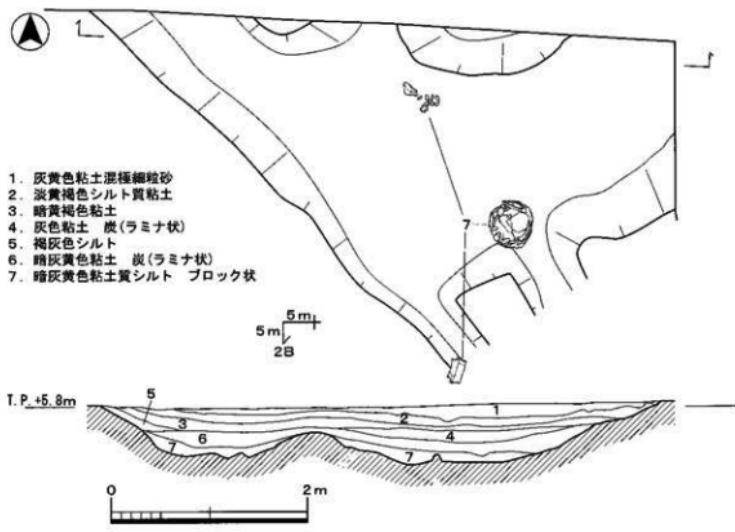


1. 淡褐色シルトブロック混シルト黄粘土
2. 淡灰黄色細粒砂混シルト 炭
3. 淡灰黄色細粒砂混粘土質シルト～シルト 植物遺体
4. 褐黃灰色細粒砂混シルト
5. 褐青色粘土質シルト 植物遺体
6. 喙褐色粘土質シルト

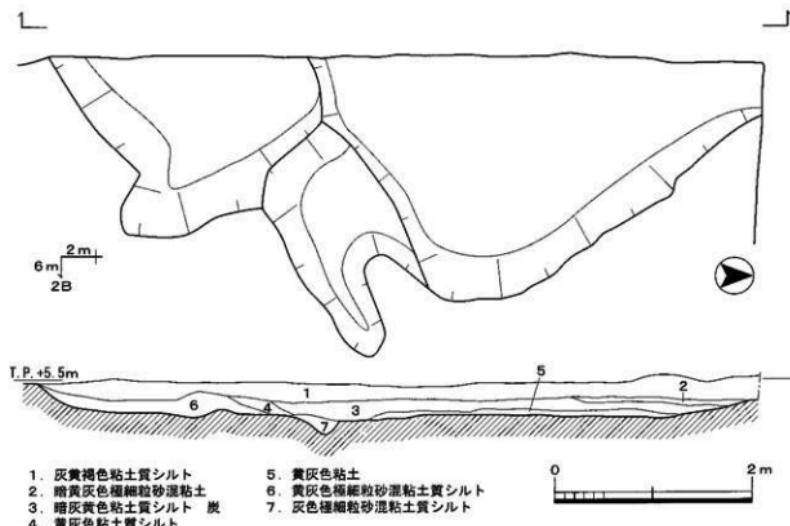
第9図 S E201平面図



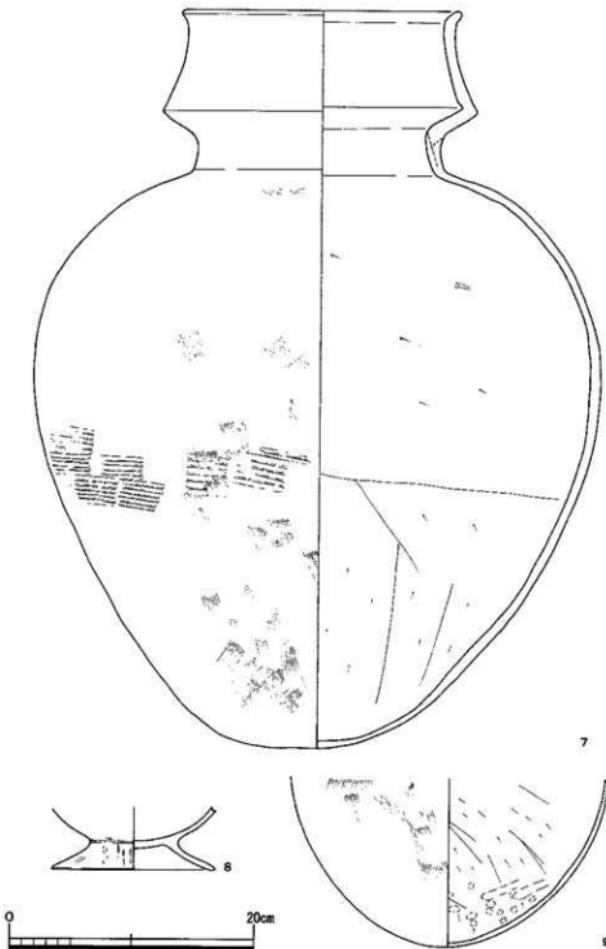
第10図 S E201出土遺物



第11図 SK201平断面図



第12図 SK202平断面図

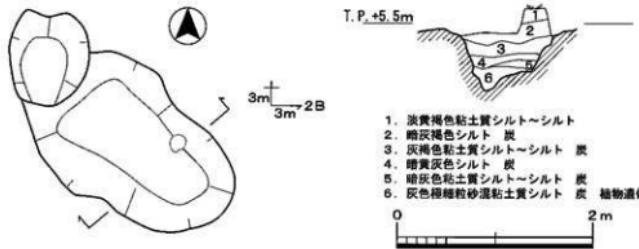


第13図 SK201出土遺物

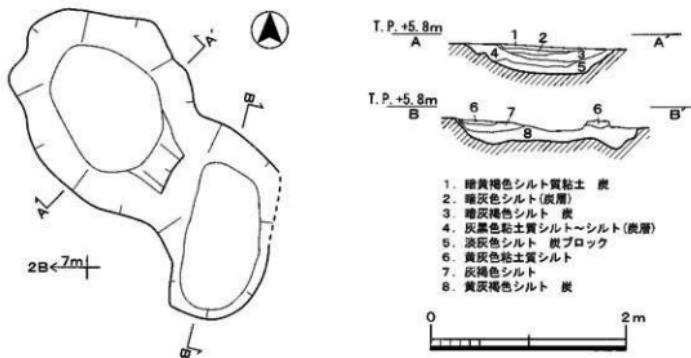
いが、台脚部ヨコナデ後外面にヘラミガキ、台脚基部から体部の外面にはハケが確認できる。色調は淡灰褐色で焼成は良好。法量は脚底径13.2cm・台脚高2.1cmを測る。台脚付短頸壺の可能性があり、詳細は後述する。9は蓋底部である。調整は外面ハケ、内面ヘラケズリで、内底面には指頭圧痕が認められる。生駒西麓産の胎土である。

S K202

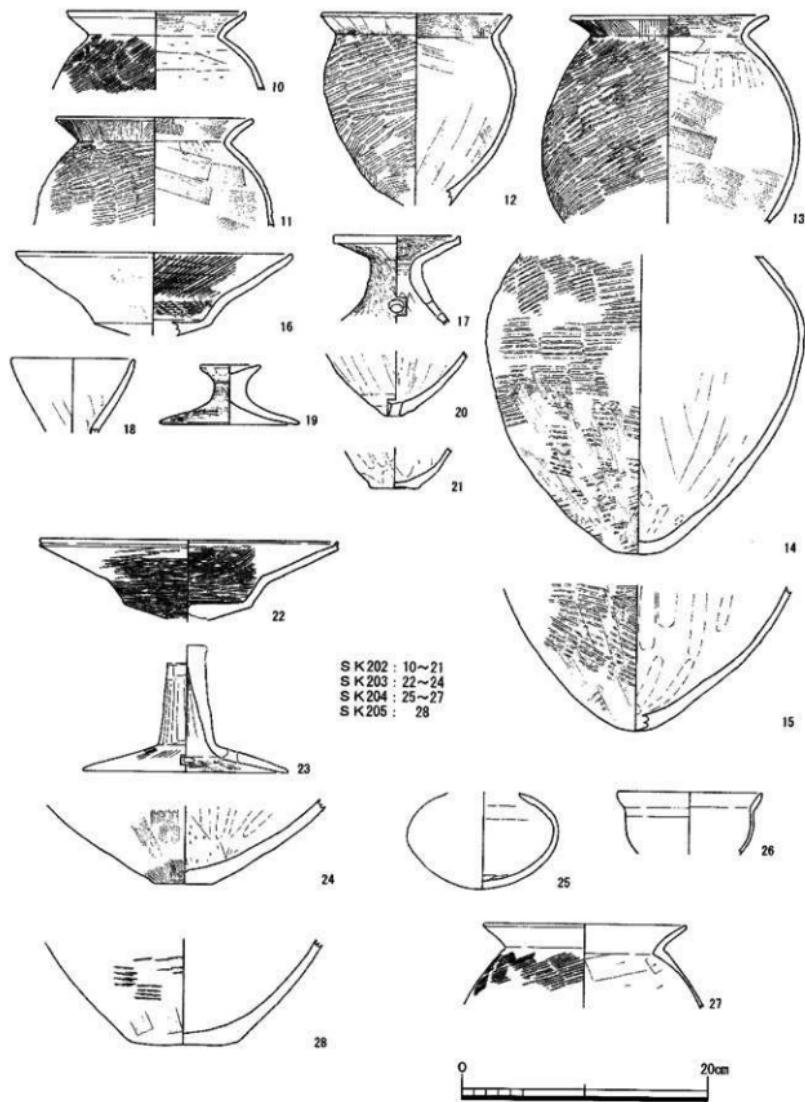
調査区の北西角 1 A 区で検出した土坑で、西・北は調査区外に続く。平面不定形であるが、複数の遺構が切り合っているものと考えられる。規模は南北7.2m以上・東西2.5m以上・深さ約60cmを測る。埋土は粘土～粘土質シルトの7層を確認した。遺物は古墳時代初頭の土器が出土しており、10～21を図化した。10は庄内式甕で、タタキは6本/cmと細い。11～15はV様式系甕である。14・15は小さな平底を有する。調整は口縁部外面縦方向、内面横方向のハケ、体部外面タタキ、内面ハケ・ナデで、14・15は外面下位にハケを加える。15のみ下位のタタキが左上りである。16は有段高杯の杯部で、調整は内面放射状ヘラミガキ、外面剥落不明である。17は器台である。ヘラミガキ調整で脚部に四方孔を施す。色調は淡灰黄色である。18は壺口縁部である。19は蓋であろう。調整は外面ハケ後ヘラミガキ、内面・つまみ部はナデである。色調は赤褐色。20是有孔鉢で、外面に黒斑を有する。21は小形の壺あるいは鉢の底部で、外面に黒斑を有する。これらの土器は10が庄内式新相、他は古相に位置付けられるが、この時期差は遺構の重複に起因するものであろう。



第14図 S K203平面断面図



第15図 S K204平面断面図



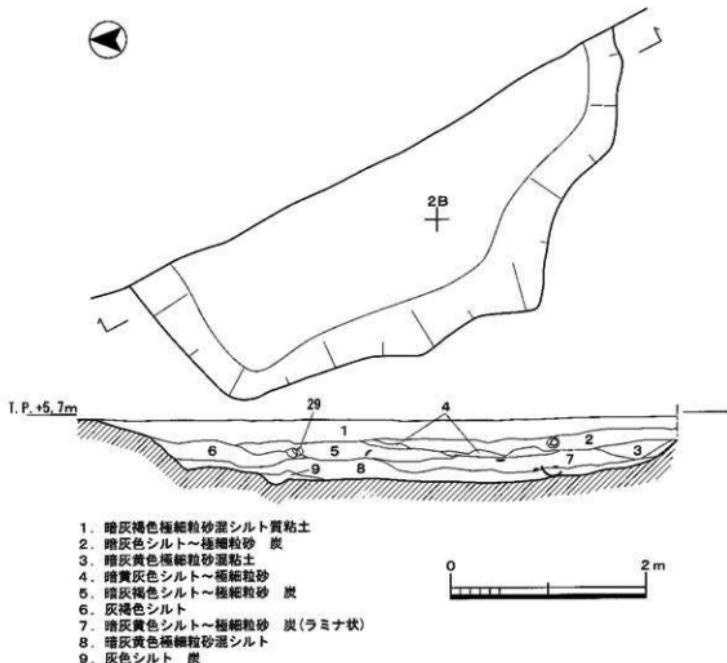
第16図 SK202~205出土遺物

S K203

1 A区で検出した土坑で、規模は $2.9 \times 1.5\text{m}$ ・深さ約90cmを測る。断面逆台形を呈し、埋土は粘土質シルト～シルトの6層から成り、全体に炭を多く含んでいる。遺物は古墳時代初頭の土器が出土しており、22～24を図化した。22は有段高杯の杯部である。調整はヘラミガキで杯部内面中央が座む。23は高杯脚部で、脚柱部は面取りされ、据部はハケ調整である。24は平底を成す底部で、壺と考えられる。外面ハケ調整で、底部外面には黒斑を有する。

S K204

1・2 B区で検出した土坑である。平面不定形であるが、梢円形の土坑が南北に切り合っているものと捉えられる。規模は北側が $2.1 \times 1.7\text{m}$ ・深さ約30cm、南側が $2.0 \times 1.2\text{m}$ ・深さ約30cmを測る。北側は断面皿状で、埋土はシルト質粘土～シルトの5層から成り、2枚の炭層が見られる他、全体に炭を多く含んでいる。南側は粘土質シルト～シルトの3層から成る。遺物は古墳時代初頭の土器が出土しており、25～27を図化した。25は壺底底部のみ完存しており、調整不明であるがヘラミガキを多用する精製品であろう。色調は橙色。26は小形鉢、27は庄内式壺である。



第17図 S K206平断面図

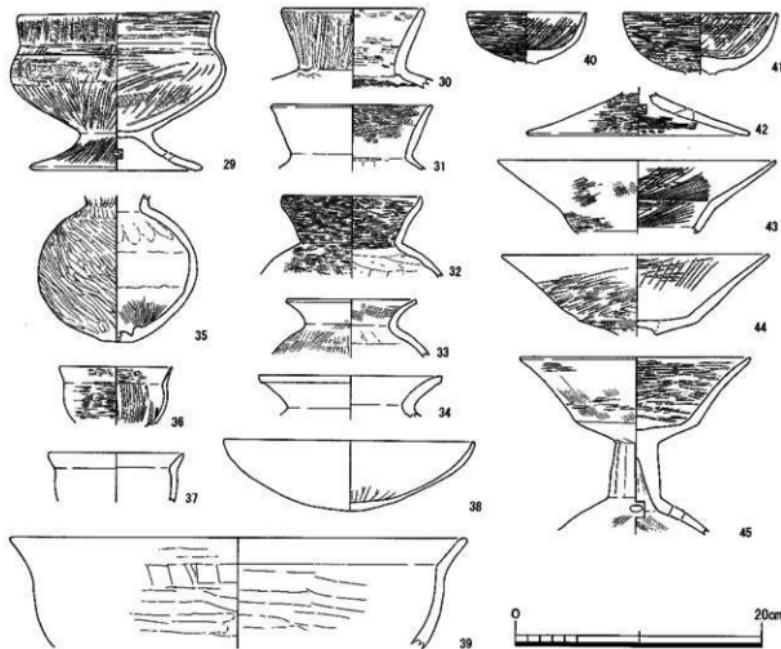
SK205

2B区で検出した土坑で、西部はSD201に削平されている。検出部分の規模は南北4.2m・東西0.9m・深さ5cmを測る。埋土は褐色シルトの単層である。遺物は古墳時代初頭の土器が少量出土しており、28を固化した。平底を成す底部で壺底部と考えられる。外面タタキ後ハケ調整で、底部外面には黒斑を有する。

SK206

1・2A・B区で検出した土坑で、東部はSD201に削平されている。平面不定形で、検出部分の規模は南北5.6m・東西2.1m・深さ約60cmを測る。断面逆台形を呈し、埋土は9層から成る。埋土は1層が埋め戻し土、以下は自然堆積層で、炭を含む層が見られる。遺物は古墳時代初頭の土器が多量に出土しており、29~62を固化した。

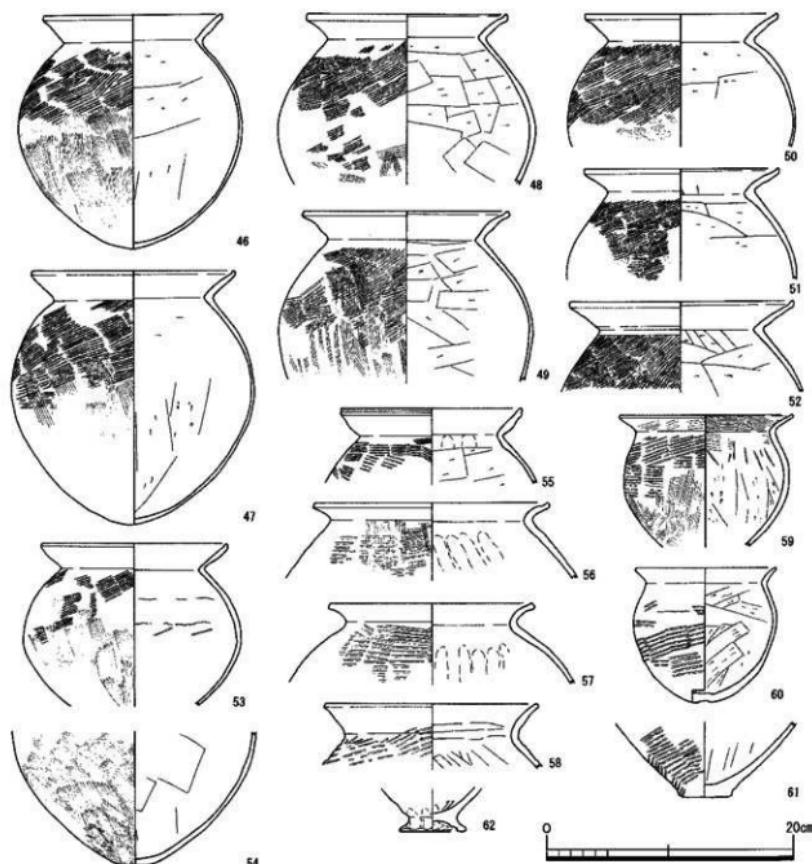
29は台脚付短頸壺である。口径16.3cm・器高12.8cm・台脚径14.0cm・体部最大径17.4cmを測る。調整は口縁部が外面ヨコハケ後縦方向のヘラミガキ、内面横方向のヘラミガキで、外面のヘラミガキは連続的で部分的にジグザグ状である。体部は内外面とも上位横方向のヘラミガキ後下から上のヘラミガキで、外面上位と内面下位にはヘラミガキ前のハケが認められる。なお不明瞭



第18図 SK206出土遺物①

であるが肩部に浅い沈線が巡る。残存部分の状況からみて全周はしないと思われる。台脚部は外面縦方向へのラミガキ、内面ヨコナデで、4方向に円孔スカシを有する。台脚部内面には輪状の器壁の剥離が認められる。胎土は久宝寺遺跡周辺の砂礫に酷似している。胎土中の砂礫は花崗岩・石英・長石・チャート・角閃石からなり、チャート・角閃石は少ない。色調は淡黄茶色～黒色で、焼成は良好であるが、淡黄茶色部分はやや不良である。

30～35は壺である。30～32は直口の短頸壺である。調整は30・32がヘラミガキを施す。33・34は広口壺である。35は小さな平底を有する底体部で、外面全面にヘラミガキを施す。36・37は小形鉢である。36はハケ後ヘラミガキで、体部内面は縦方向に施している。口縁部内面に瘤みがあ



第19図 SK 206出土遺物②

るが、小石の痕跡であろう。37は皿状の浅鉢で、口径20.4cm・器高5.7cmを測る。内面に放射状のヘラミガキを施す。色調は赤褐色を呈し、搬入品と思われる。39は大形鉢である。ナデ調整で、外面に黒斑を有する。40~42は楕円高杯である。いずれもヘラミガキ調整で、42は4方孔を有する。40・41は口径9.6cm・12.6cmを測る。43は有段高杯、44・45は有棱高杯である。いずれもヘラミガキ調整である。

46~54は庄内式壺である。調整は外面上部タタキ、下部ハケ、内面ヘラケズリである。外面のハケは49・51・52が上部にまで及んでいる他は最大径部以下である。46・47はほぼ完形に復元され、口径・器高・体部最大径は46-14.4・19.0・18.0cm、47-16.4・20.6・19.5cmを測る。54は小さな平底を有しやや古相を呈する。いずれも使用済みで、特に48の外面には厚く炭化物が付着している。いずれも生駒西麓産の胎土である。

55~61はV様式系壺である。外面のタタキは55~57が平行~左上り、他が右上りである。内面調整は55・59・60がヘラケズリを施し、他はナデである。60はほぼ完形に復元され、口径11.2cm・器高10.8cmを測る。底部は尖り氣味で中央が窪む。

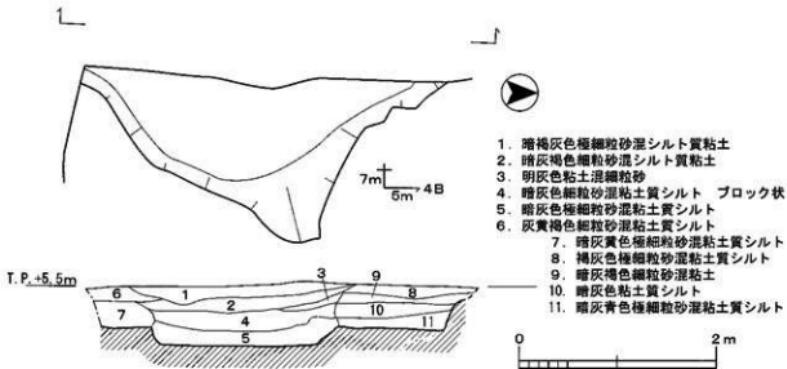
62は台脚部で、小形の壺、あるいは鉢の底部と考えられる。

S K207

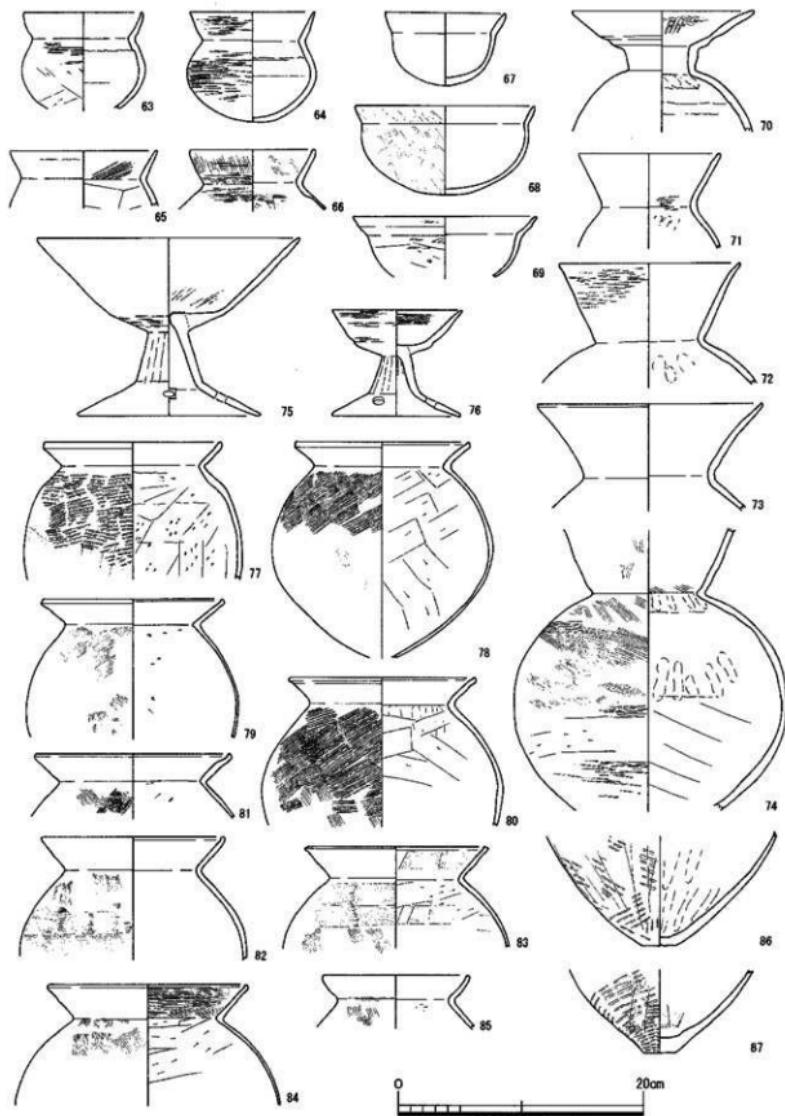
調査区南西角4A区で検出した土坑で、西は調査区外に続く。検出部分の規模は南北3.7m・東西1.7m・深さ約65cmを測る。断面逆台形を呈し、埋土は粘土質シルトを基調とする11層を確認した。西壁断面によると、中心部を掘り直していると考えられる。遺物は上層から古墳時代初頭~前期の土器が多く出土しており、63~87を図化した。

63~66は小形壺である。いずれも外面の最終調整はヘラミガキである。いわゆる小形丸底壺といえる63・64は、口径と体部最大径がほぼ等しい。

67・68は小形鉢である。いずれも胎土中に砂粒を多く含む。69は有段口縁鉢で、色調は褐灰色を呈する。



第20図 S K207平面断面図



第21図 S K207出土遺物

70は複合口縁壺である。磨耗の為調整は不明瞭であるが、口縁部内面はヨコハケ後ヘラミガキである。71~74は直口壺である。71は口縁部内面、72は外面に黒斑を有する。

75・76は有稜高杯である。共に調整はヘラミガキで、鋸端部に黒斑を有する。

77~81は庄内式壺である。体部調整は外面上部タタキ、下部ハケ、内面ヘラケズリで、81のハケは肩部に及ぶ。77はやや太筋のタタキで、器壁が厚く、庄内式壺の最古相に位置付けられる。78~81は生駒西麓産の胎土である。82~85は布留式壺である。いずれもハケ調整で、口縁端部は小さく内側に肥厚し、83は面を成す。布留式期古相に位置付けられる。86・87はV様式系壺としたが、86は壺の可能性もある。共に小さな平底を有し、調整は外面タタキ後ナデ、内面ナデ・ハケである。

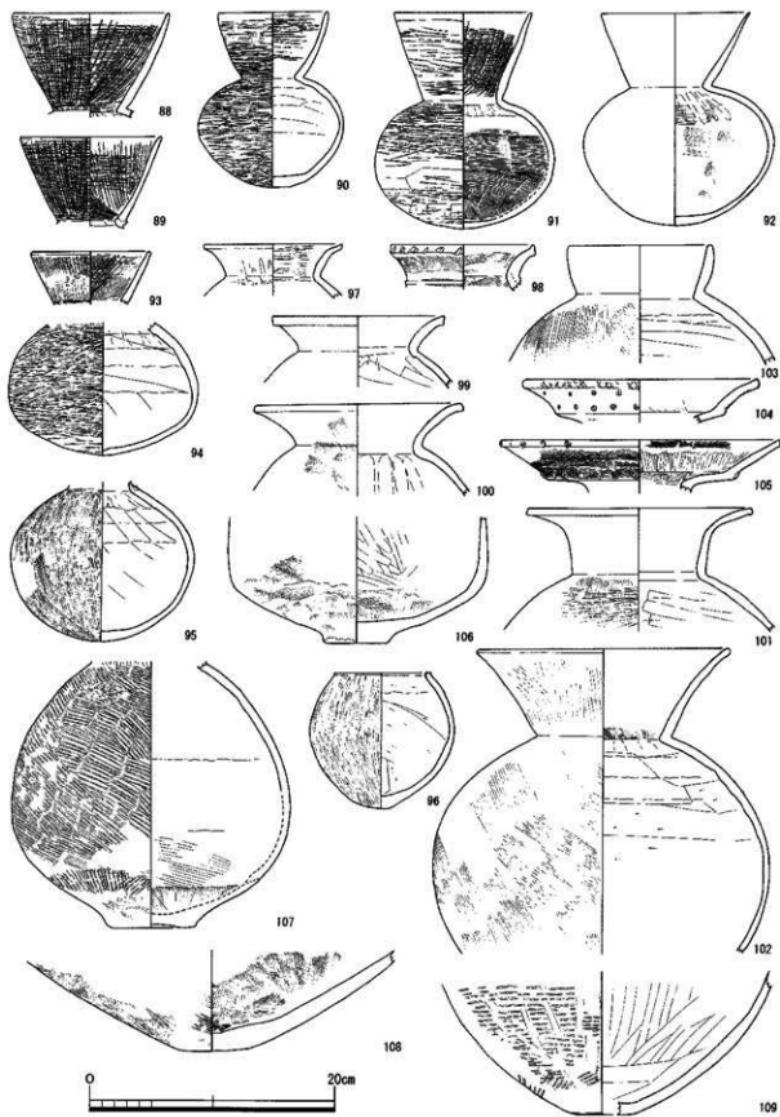
S D 201

第1面 S D 101の下層部にあたる。多量の古墳時代初頭後半(庄内式期新相)の土器の他、木製品では臼が出土している。遺物の出土状況からは両岸、特に西岸からの投棄が窺える。

88~185を図化した。88~109は壺である。88~94はヘラミガキ調整を多用する精製の直口壺である。口縁部は直線的なものと内湾気味のものがあり、底体部は扁球形を成す。92は磨耗のため不明であるが同様の調整であろう。法量的に90(口径9.0cm・器高14.6cm)や口縁部の短い93がやや小形である。91は口径12.2cm・器高17.7cm。89は口縁部外面に、90は体部外面に黒斑を有する。色調は89・92が橙色、他は淡灰褐色を呈する。95もヘラミガキ調整であるが、88~94とは趣が異なり、頸部が細く底体部は球形に近い。底部と体部外面に黒斑を有する。9は無頸壺で、口径8.0cm・器高11.3cmを測る。口縁部はわずかに立ち上がり、底は小さな平底を成す。調整は外面ヘラミガキで、下位にハケが残り、内面はヘラケズリ。97~102は広口壺である。98は口縁端面に浅い刻み目を施し、頸部に凸帯を巡らせる。101は頸部から口縁部が外反するもので、形態的に四国東部産の可能性がある。体部外面はヘラミガキで、上位にはハケが認められるが、ヘラミガキに先行するタタキを施している可能性がある。102は生駒西麓産の胎土である。口縁部~体部に黒斑を有する。103は短頸壺で、器壁の厚さが特徴といえる。104・105は口縁部に加飾された複合口縁壺である。104は交差する刻み目+竹管文、105は竹管円形浮文+柳描波状文を施す。106~109は底体部である。106は大きく開く底部から体部が直立する。ハケ調整で、色調は淡灰褐色で、内面は黒色を呈する。107は下膨れの器形で、調整は全面にタタキを施し、体部最下位にハケが見られる。108・109は平底を成す底部で、108はハケ、109はタタキ調整である。共に黒斑を有する。

110・111はいわゆる小形丸底壺で、口径は体部径より小さい。調整はヘラミガキを多用するが、110は先行するヘラケズリが確認できる。110は完形で、口径9.9cm・器高9.7cm・体部最大径11.2cmを測る。112~119は口径が体部径を凌ぐ小形鉢である。調整はいずれも口縁部~体部外面上位ヨコナデ、底体部外面ヘラケズリ、内面ナデというものである。底部は丸底のもの(113・114・117)と、やや尖り気味のもの(115・118・119)がある。120・121は口縁部がやや外反する小形壺である。外側調整は120がハケ、121がナデで、121の底部はヘラケズリの為尖り底を成す。121は生駒西麓産の胎土で外面に黒斑を有する。

122~124は口縁部~体部、125は台脚部の小片である。122はヨコナデ後外面に装飾的なジグザグ状のヘラミガキを施す。焼成良好で色調は淡黄灰色を呈する。123・124は口縁部ハケ後ヨコナ

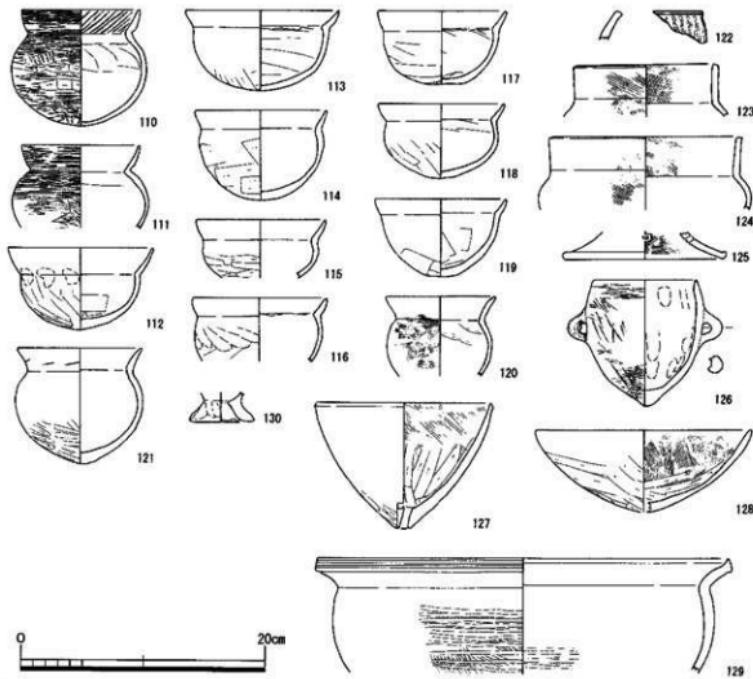


第22図 SD 201出土遺物①

テ、体部は外面ハケ、内面ナデ。焼成良好、色調は淡灰茶色で、124の外面は淡赤色を呈する。なお123・124は同一個体の可能性もある。125は外面ヨコナデ、内面ハケで、円孔スカシを有する。色調は暗赤褐色～灰黄色を呈し、焼成は非常に良好で硬質である。以上の4点はSK206出土の台脚付短頸壺と同器種の可能性がある。詳細は後述する。

126は尖底を有する把手付鉢で、復元口径8.3cm・器高10.6cmを測る。調整はナデ後口縁部と底部に横方向、体部不定方向の粗なヘラミガキを施している。体部中位やや上には縱方向の環状耳(おそらく一対)を付す。胎土はSK206の29と同様で、胎土中の砂礫は花崗岩・石英・長石・チャート・角閃石からなり、チャート・角閃石は少ない。これは久宝寺遺跡周辺の砂礫に酷似している。色調は淡灰茶色、焼成は良好で、口縁部外面に直径約5cmの黒斑を有する。なお当資料は、伽耶地域において軟質両耳甕と呼ばれる土器と類似性が認められる。詳細は後述する。

127は有孔鉢で、口径15.0cm・器高10.5cmを測る。調整は外面ヘラケズリ後ナデ、内面ハケ後ヘラケズリである。底部外面に黒斑を有する。128は鉢で、調整は127と同じである。生駒西麓産の胎土である。129は大形の鉢で、調整はハケ後ヘラミガキである。130は手捏ね成形による脚台

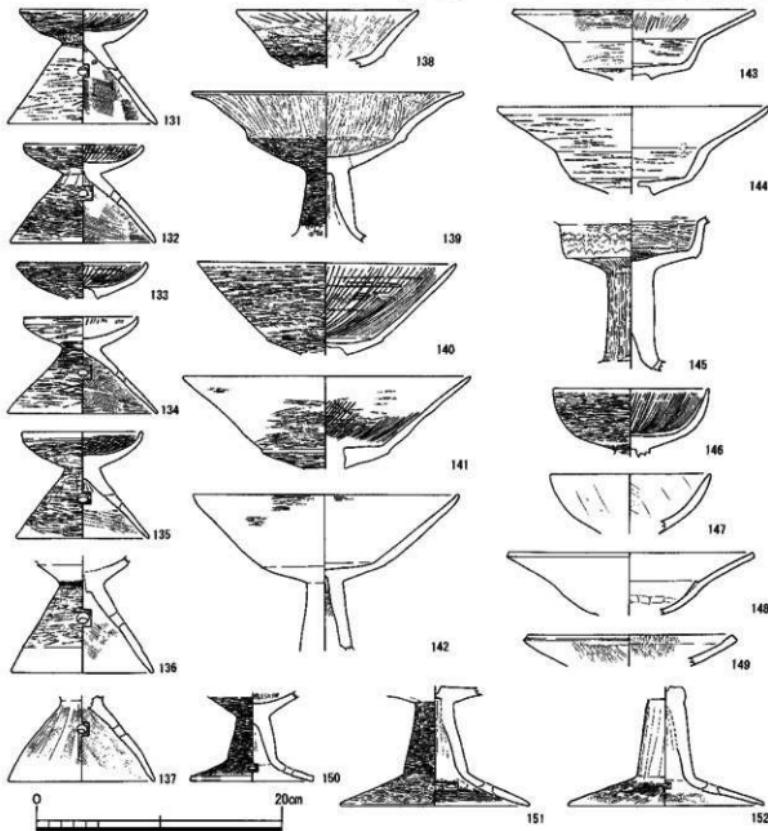


第23図 SD201出土遺物②

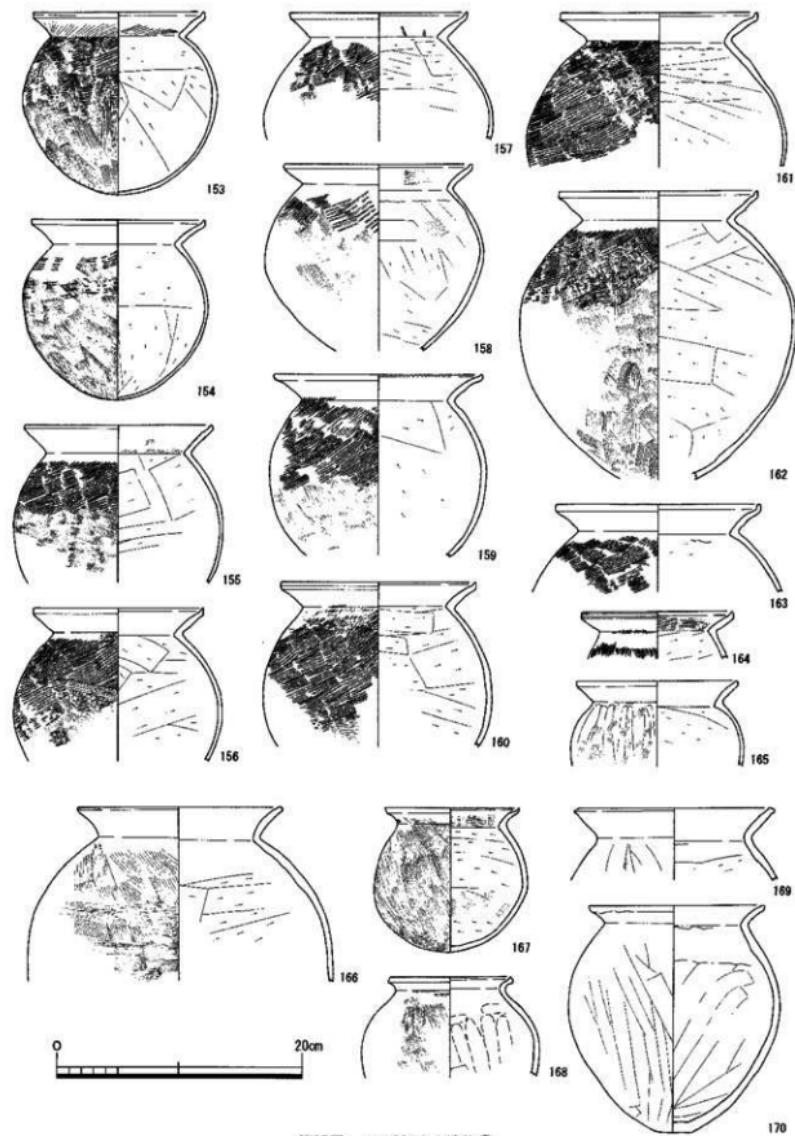
部で、製塩土器の可能性がある。

131～137は小形器台で、131～136は外面にヘラミガキを多用する精製品、137はハケ調整である。口縁端部は131・132が三角形、133～135が短く立ち上がる。脚部は内面ハケ調整で、円孔スカシはいずれも4方向である。

138～142は有稜高杯である。138・139は口縁部が外反するものでV様式系の高杯といえ、調整はヘラミガキで、138の口縁部外面はハケの後疊らに施している。140～142は口縁部が長く伸びるもので、142は140・141に比して稜が不明瞭である。141・142は口縁端部に黒斑を有する。143～145は有段高杯である。調整はヘラミガキで、145は杯部外面に雑な櫛描波状文を施す。144は杯部完存で口径22.4cmを測り、口縁端部に黒斑を有する。146はヘラミガキを多用する精製の椀



第24図 SD 201出土遺物③

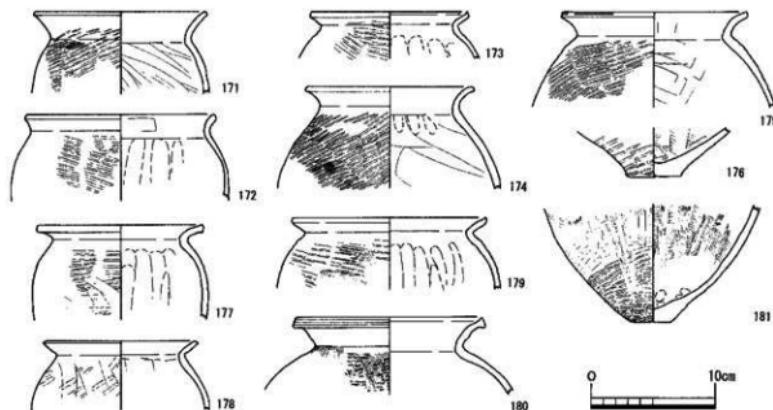


第25図 SD 201出土遺物④

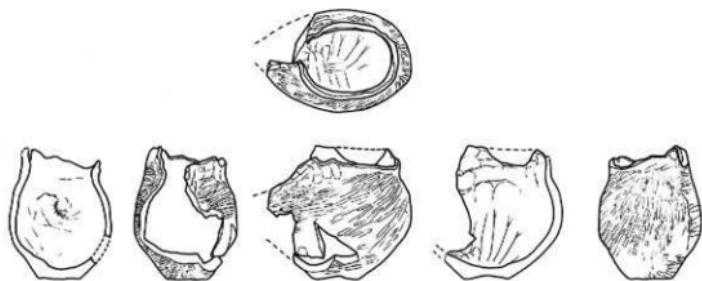
形高杯である。147も椀形高杯と思われるが、ヘラミガキは認められず、外面にはクラックが顕著にみられる。148は杯部の小片で、有段高杯を曲線的にしたような形態である。ナデ調整で、口縁部～杯部間の内面に断面三角形の凸帯を巡らす。焼成良好で堅緻。V様式の資料としては円盤状の杯部に凸帯を巡らすものが久宝寺遺跡第17次調査で出土している。149は口縁部の小片で、調整はヘラミガキである。高杯としたが明確ではない。150～152は高杯脚部である。調整は150・151がヘラミガキ、152がハケである。151・152は杯部中央が壅むもので、共に脚端部に黒斑を有する。

153～181は甕。153～163は庄内式甕である。調整は外面が上部右上がりのタタキ後下部ハケ、内面ヘラケズリ。外面のハケは162が頸部付近まで密に施すが、他は肩部以下である。163・164は完形・ほぼ完形の小形品で、口径・器高・体部最大径は153-13.9・14.9・15.8cm、154-14.2・14.7・15.0cmを測る。球形に近い底体部で、154は底がやや尖り気味である。いずれも生駒西麓産の胎土である。164-170は体部にタタキを施さない甕である。外面調整は164～168がハケ、169・170はナデ・板ナデである。内面調整は168・170がナデ、他はヘラケズリである。167はほぼ完形で、口径11.0cm・器高11.7cmを測る。また全容の知れる170は口径14.2cm・器高18.5cm・体部最大径17.1cmを測り、底部は平底を成す。168・170は形態・調整等から四国東部産の可能性がある。171～180はV様式系甕である。外面のタタキ調整は172・173・179が左上り、177・180がほぼ水平、他が右上りである。177～181はタタキ後ハケを施す。内面調整はナデ・板ナデ・ハケがあり、ヘラケズリを施すものはない。181は平底を成し、底部内面に指頭圧痕がみられる。

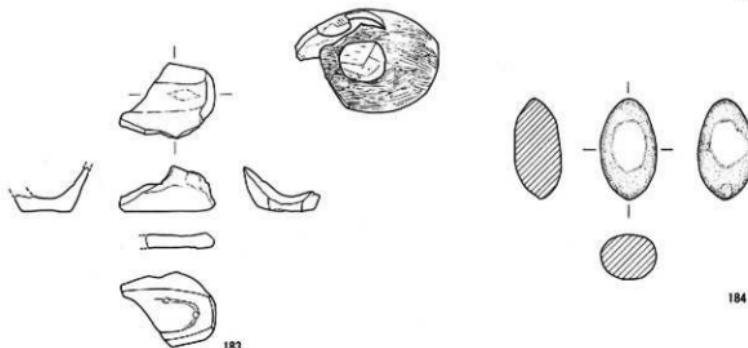
182は注口土器である。注口部は欠損しているが、平面形は前後に長い楕円形から前方にすぼまる注口に至ると考えられる。調整は、外面は口縁部～体部の全面をヘラミガキし、注口部上部と底面はヘラケズリ。口縁部～内面はナデである。なお後方部内面には初期須恵器の甕内底面に



第26図 SD201出土遺物⑤

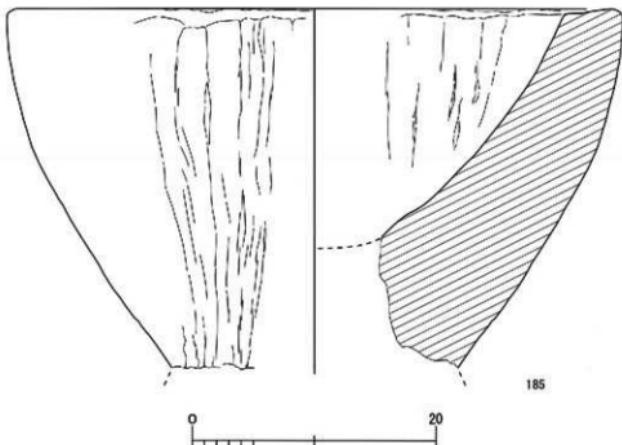


182



184

183



185

第27図 S D201出土遺物⑥

見られるようなシボリ目が確認でき、この部分で粘土を閉塞していると思われる。法量は口径7.9×6.2cm・器高10.6cm・体部幅8.1cm・底径3.7×3.2cmを測る。類例の少ない器種であるが、奈良県桜井市纏向遺跡、大阪府堺市下田遺跡で出土している。形態的に近いといえる纏向例は、調整がタキ・ナデである。下田例は当資料と同じく全面にヘラミガキを施している。下田遺跡では形態的に皮袋との関連性を指摘しており、下田遺跡出土の皮袋については、『粘土板を舟形に丸めて成形され、上端で粘土板の端を接合して作られている。先端部が注口になる可能性もある。』とされている。当資料も成形に際しては粘土板の使用が考えられ、両側の粘土板の後方部を接合(閉塞)し、前方部は注口部の上下を接合したものと推察される。

183は船形土製品で、底部～片舷側部の一部のみの破片で全容は不明である。底面は周縁がやや高くなっている。外面がやや赤みを帯びており、朱塗りであった可能性がある。内面には黒斑を有する。残存長7.5cm・残存高3.6cm・器壁の厚さ約1.0cmを測る。

184は平面梢円形を呈する磨り石で、長さ8.0cm・幅4.3cm・厚さ3.6cmを測る。使用面は表裏2面で平滑になっている。

185は木製臼である。取り上げ時に崩壊し、台部の実測は不可能であった。法量は口径50.4cm・器高は現地実測図から43cm前後で、台部高約13cmとなる。

S D 202

1 B区で検出したやや弧状を成す溝で、西部はS D 201に削平され、北は調査区外に続く。規模は検出長7.7m・幅0.9～1.7m・深さ5cmを測る。断面皿状を成し、埋土は褐色シルトの単層である。埋土はS K 205と同じであり、一連の遺構である可能性がある。遺物は古墳時代初頭の土器が出土しており、186・187を図化した。186は小形器台である。杯部中央は円板充填による。187は椀形高杯である。調整はヘラミガキである。

S P 201

2 A区で検出したピットで、平面形はほぼ円形を呈し、規模は25×22cm・深さ約38cmを測る。埋土は暗灰黄色極細粒砂混粘土質シルトの単層である。遺物は出土していない。

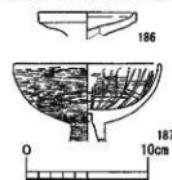
S P 202

3 A・B区で検出したピットで、平面形はほぼ円形を呈し、規模は直径約60cm・深さ約6cmを測る。埋土は淡灰褐色粘土質シルトの単層である。遺物は出土していない。

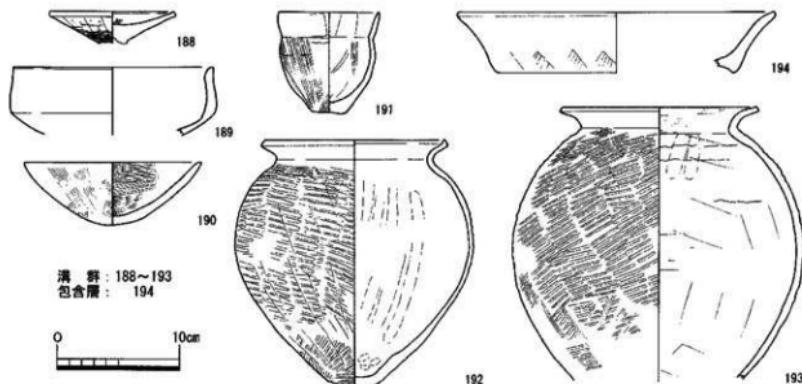
溝群

第2面のベース面はS D 201から南・西に向かって下がる状況で、低い部分ではS I 201やS E 201の他、複雑に入り組んだ多数の溝(溝群)が検出された。S I 201を境に北と西・南でやや様相が異なる。北側では北東～南西方向の溝が主で、東西方向の溝がこれらを切っているようである。溝は幅30～60cm・深さ10～30cmを測る。西・南側では様々な方向の溝が入り組んでおり、幅30～100cm・深さ10～30cmを測る。南・西へ落ち込む部分の埋土は褐色系極細粒砂混シルト質粘土で、溝部分にもほぼ同様の埋土が堆積している。溝群の性格については生産関連と考えられるが明らかではない。南西部の第32次調査でも耕作関連の溝群が検出されており、一連の遺構である可能性が高い。

溝群からは庄内式期の土器が出土しており、188～193を図化した。この内188・191～193につ



第28図 S D 202出土遺物



第29図 溝群、包含層出土遺物

いは出土地点を第6図に示したが、189・190は溝群検出中の出土である。188は円盤状の杯部を成す小形器台である。外面調整は下から上の放射状ヘラケズリ後ヘラミガキである。189は鉢あるいは複合口縁壺の口縁部と考えられるが明確でない。橙色を呈し、搬入品であろう。4B区出土。190は浅い碗形の鉢で、調整はハケ。4A区出土。191は小形壺である。ほぼ完形で、口径8.0cm・器高8.1cmを測る。調整はヘラミガキで、底面に黒斑を有する。192・193はV様式系壺である。192は口縁端部を摘み上げ、底部は平底である。外面のタタキは左上りで、底部付近が右上りである。タタキの後板ナデを疎に施す。内面はナデで、底部には指頭圧痕が認められる。193はタタキ後体部下位にハケを加える。

包含層出土遺物

複合口縁壺(194)を図化した。口縁部外端面下位に、線刻による上向きの鋸歯文を巡らせる。色調は黄褐色で、形態的に山陰地方からの搬入が考えられよう。1B区北側溝掘削時の出土で、SK201に帰属する土器である可能性が高い。

第3章まとめ

今回の調査では周辺の調査成果と同様、主に古墳時代初頭～前期の遺構・遺物が検出された。出土遺物はコンテナに24箱を数える。

古墳時代初頭(庄内式期)の遺構は調査地全域に認められた。古墳時代前期(布留式期)の遺構としては南西部のSK207があるが、遺構密度が低くなっていること、集落の規模が縮小したのかもしれない。なお東部(第13次調査)や南西部(第32次調査)では古墳時代初頭～前期の遺構が確認されているが、今回の調査の契機となった遺構確認調査の成果によると、当該期の遺構はそれほど北

には広がらないようである。

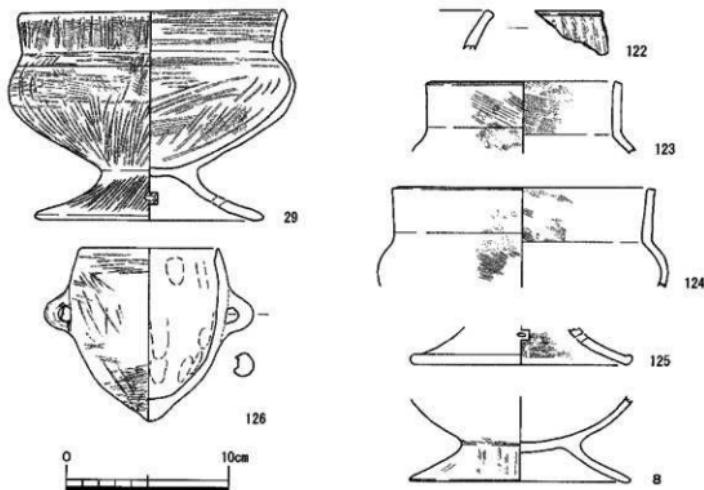
第3層からは漆器碗が出土しており、周辺の西部・東部の調査では奈良時代～中世の遺構が検出されていることから、当地にも集落城が広がっていた可能性がある。

注目すべき遺物として、庄内式期新相に比定されるSK201・SK206・SD201から出土した7点の土器(台脚付短頸壺・把手付鉢)がある。これらの古式土師器は、畿内では系譜が求められず、当該期の伽耶地域にみられる壺形土器・軟質両耳甌に、特に形態・技法等に類似性が認められることから韓式系土器と考えた。これらの土器と韓国出土資料とを比較してみる。

台脚付短頸壺と伽耶地域における壺形土器との相違点としては、まず台脚部では基部径が小さいこと(29)があげられる。壺形土器は基部径が大きく輪状を成すが、その点で8は壺形土器の特徴を備えているといえる。また壺形土器の脚端部は玉縁状に肥厚するものが多いが、8・29は丸く收めている。さらに円孔スカシを穿つ(29・125)のは日本のといえよう。体部では肩の張りが小さく(123・124)、壺形土器の特徴である文様帶としての意識が窺えない。29については肩部に沈線が巡る可能性があり、これが文様帶を意識しているのかもしれない。壺形土器にも肩部に沈線を巡らせるのみの例が見られる。

把手付鉢(126)の類例としては、釜山・老圃洞35号墳出土の軟質両耳甌がある。これは口径15cm・器高26cmを測り、耳は牛角状を呈し、外面調整はハケである。法量的にみて126はミニチュア製品の可能性がある。またこのように尖り底形態の甌に環状の耳が付く例は、韓国ではみられないようである。

壺形土器については安在暭氏による分類・編年がある。これは壺形土器の体部・口頸部の形態



第30図 韓式系土器

を分類し、さらに文様、脚部の規格等との相関関係から編年をしたものである。全容のわかる²⁹をこれに照らし合わせると、逆三角形の体部・直立する口頸部・無文等の特徴から、安氏の「III C2c」に分類されるものと捉えられ、時期は3世紀後半に比定されている。今回の資料は庄内式期新段階に比定され、実年代では安氏の爐形土器編年にはほぼ合致するものと考えられる。

なお胎土分析によると²⁹・¹²⁶は久宝寺周辺で製作された可能性が高い。これらの土器が伽耶地城における爐形土器・軟質両耳壺を模倣したものであるとすれば、韓式系土器の定義に当てはまるといえる。久宝寺遺跡の西に隣接する加美遺跡では、当地から西に約350m地点での調査において、同時期頃の方形周溝墓の周溝から陶質土器の広口壺が出土している。これらは伽耶地域の土器編年、また当時の当地域と大陸との交流を考えるうえで重要な資料といえよう。

寺井誠氏は、把手付鉢(126)について韓國に系譜を求められるとされているが、台脚付短頸壺(29)について、「器形としては爐形土器に似ており、製作時に在地の技法や器形的な特徴を組み合せて爐形土器を目指した可能性はあるものの、北部九州により類似した器種が存在する限り、むしろそちらに系譜を求めたほうが妥当ではないか。」と述べられている。この中で示された福岡県豊津町永川ノ上遺跡出土の台付壺は、²⁹に酷似しており、的射た指摘である。また北九州地方では福岡市西新町遺跡・藤崎遺跡で爐形土器の模倣と考えられる土器が出土している。伽耶地城と久宝寺がダイレクトに関係するのではなく、より朝鮮半島に近い北九州地方・山陰地方等を介している可能性を考え、類例等を検討する必要性を当初より指摘していたが、その一例が確認されたと言える。ただ台脚基部に注目すると、やはり²⁹は小さいながらも輪状を呈しており、また出土構構が異なり底部のみの資料であるが、台脚部がより爐形土器に類似する8の存在は、久宝寺における台脚付短頸壺が爐形土器の模倣である可能性を残しているといえよう。

今回報告の韓式系土器に関しては、安在啓、奥田尚、金斗皓、申敏澈、武末純一、田中清美、寺井誠、堀田啓一、米田敏幸各氏をはじめ、韓式系土器研究会の皆様から多くの有意義な御教示をいただき、小稿をまとめるにあたり参考にさせていただきました。記して感謝いたします。

註

- 註1 米田敏幸1995「4. 久宝寺遺跡(94-65)の調査」『八尾市内遺跡平成6年度発掘調査報告書1 八尾市文化財調査報告31 平成6年度田庫補助事業』八尾市教育委員会
- 註2 関川尚功・他1999「轟向遺跡 第5版」奈良県立橿原考古学研究所編
- 註3 西村 歩1996「下田遺跡－都市計画道路常盤浜寺線建設に伴う発掘調査報告書－」(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書第18集」財団法人大阪府文化財調査研究センター
- 註4 これらの器種名については、既発表資料では韓國での名称を用い、炉(爐)形土器・軟質両耳壺としていたが、あくまでも古式土器であり、舶載品との混同を避けるため、本報告ではそれぞれ台脚付短頸壺・把手付鉢と改めた。
- 註5 台脚付短頸壺の畿内における類例としては、奈良県天理市平等坊・岩室遺跡出土品があるのみであろう。青木勘時1996「平等坊・岩室遺跡」『天理市埋蔵文化財調査概報 平成4・5年度』天理市教育委員会
- 註6 この沈縫については、当初は一連のヘラミガキ調整の一節と捉えていたが、武末純一氏のご指摘により判明したのである。また類例として下記の資料をご教授頂いた。したがって既発表資料(坪田1995・1996)掲載の実測図には表現されていない。この沈縫は爐形土器の模倣である根據のひとつとなるものと考えられるが、発表が遅くなつたことについて深謝いたします。
- ・梁山平山車遺跡(第7号住居址出土遺物)

- 東亜大學校博物館1998『薺山平山里遺跡 古跡調査報告書第28回』世宗文化社
- ・下岱遺跡(6号木槨墓出土遺物)
- 釜山大學校博物館1997『蔚山下岱遺跡—古墳I』釜山大學校博物館研究叢書第20輯
- ・坪田1995「久宝寺遺跡出土の朝鮮半島系土器について」『大阪府下埋蔵文化財研究会(第31回)資料』
(財)大阪文化財センター
- 註7 申敬澈1992「金海禮安里160号墳について」『伽耶考古学論叢1』伽耶文化研究所より引用
- 註8 安在啓1994「三韓時代後期瓦質土器叫幅牛」『嶺南考古學14』嶺南考古學會
- 註9 米田敏幸・奥田尚1996「久宝寺・加美遺跡出土の三韓時代系土器の意義について」『韓式系土器研究VI』韓式系土器研究会
- 註10 寺井誠2001「近畿地方の三韓系土器」『大阪市文化財協会 研究紀要第4号』財団法人大阪市文化財協会
- 註11 柳田康雄・他1996『徳永川ノ上遺跡II 一般国道10号線椎田道路関係埋蔵文化財調査報告書第7集』福岡県教育委員会
- 註12 重藤輝行2006『西新町遺跡VII』福岡県文化財調査報告書第208集』福岡県教育委員会
- 松村道博1989『福岡市 西新町遺跡 福岡市埋蔵文化財調査報告書第203集』福岡市教育委員会
- 註13 久住猛雄・他2004『藤崎遺跡15 -藤崎遺跡32次調査報告-』福岡市埋蔵文化財調査報告書第324集』福岡市教育委員会
- 註14 坪田真一1996「久宝寺遺跡出土の韓式系土器について」『韓式系土器研究VI』韓式系土器研究会
- 参考文献**
- ・(財)大阪府文化財センター2003『古墳出現期の土師器と実年代 シンポジウム資料』
 - ・武木純一1985「慶尚道の「瓦質土器」と「古式陶質土器」—三韓土器の提唱—」『古文化叢叢第15集』九州古文化研究会
 - ・米田敏幸1993「古式土師器に伴う韓式系土器について」『韓式系土器研究IV』韓式系土器研究会

図 版

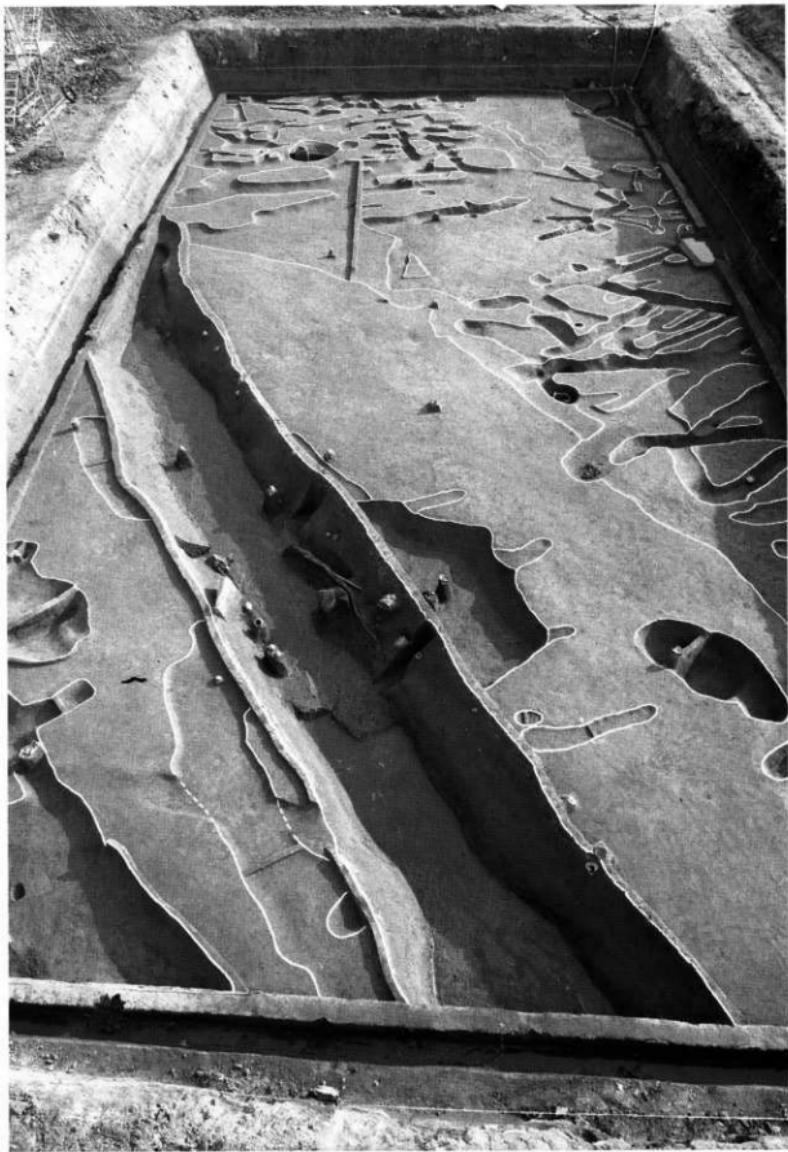


第1面(北から)



S D 101・201北壁

図版
2



第2面(北から)



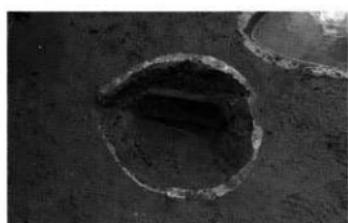
S I 201(西から)



同 P1(南から)



同 P2(北から)



同 P4(北から)



同 P3(東から)

図版 4



S E201(南から)



S K201(北東から)



S K202上面遺物出土状況(西から)



S K202(南西から)



S K203(南東から)



S K204(北西から)



SK 206(北から)



SK 206東壁土器(29)出土状況



SK 207上面遺物出土状況(南から)



SK 207(南東から)



SD 201中央付近遺物出土状況(北東から)



SD 201内臼(185)出土状況(北東から)

図版6

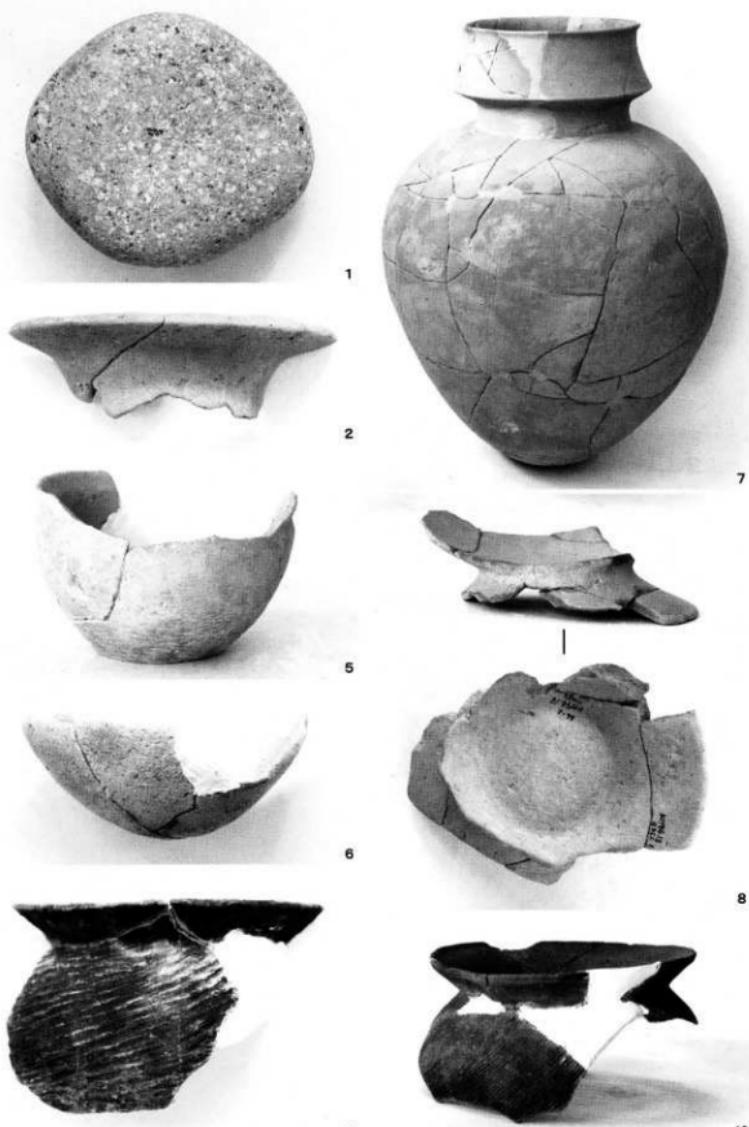


SD 201(北西から)



溝群(東から)

図版7 出土遺物



S I 201(1)、S E201(2・5・6)、S K201(7・8)、S K202(10・11)

圖版 8
出土遺物



12



20



13



17



14



22



19



23

S K202(12~14・17・19・20)、S K203(22・23)



25



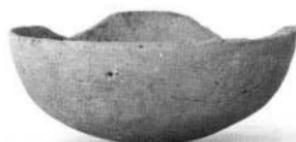
29



38



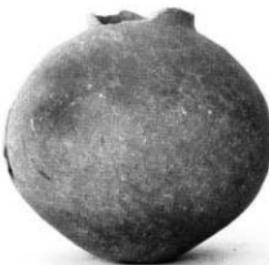
40



41



44



35



32



45

S K204 (25)、S K206 (29・32・35・38・40・41・44・45)

図版10
出土遺物



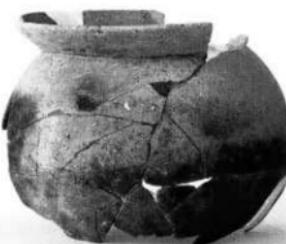
46



47



49



53



59



60



64



67

S K206(46・47・49・53・59・60)、S K207(64・67)

図版 11
出土遺物



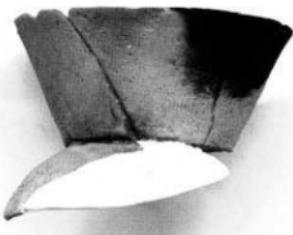
68



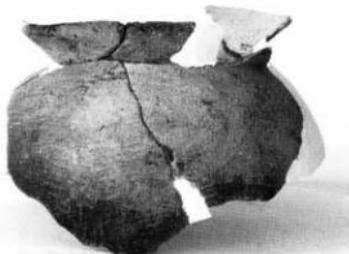
70



75



72



77



78



82



86

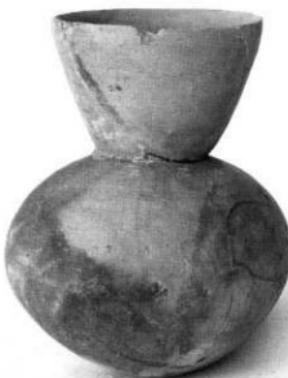
S K207

圖版12

出土遺物



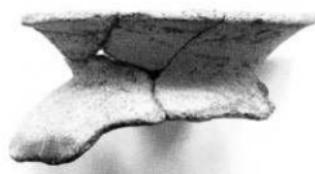
88



90



89



97



91



92



94

S D201

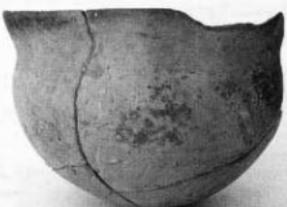


図版14
出土遺物



S D 201

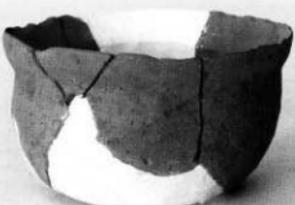
図版 15
出土遺物



114



122



116



123



119



125



124
S D201

圖版
16

出土遺物



126



127



128



131



129



138



133

S D 201





153



154



157



158



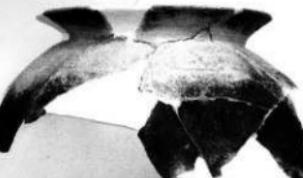
162



160



165



166



167



170



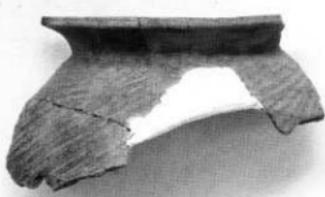
171



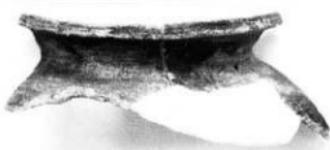
172



174



175



176

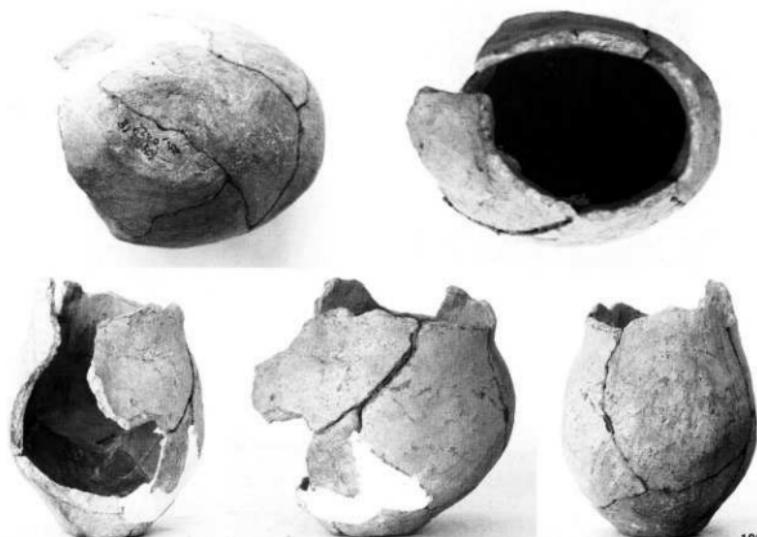


179



181

S D 201



181

183

184

S D 201



圖版 21
出土遺物



186



191



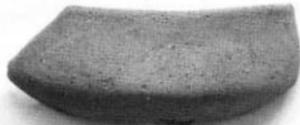
187



188



192



189



194



193

S D 202(186・187)、清群(188・189・191～193)、包含層(194)

IV 久宝寺遺跡第27次調査(KH99-27)

例　言

1. 本書は、大阪府八尾市龜井町三丁目1番72号他で実施した排水処理場・工業用水槽等建設に伴う久宝寺遺跡第27次調査(KH99-27)の発掘調査報告書である。
1. 本調査は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財調査指針に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会がシャープ株式会社から委託を受けて実施したものである。
1. 調査は当調査研究会　西村公助が担当した。
1. 現地調査は、平成11年5月17日に着手し、同年7月21日に終了した。調査面積は約485m²である。
1. 現地調査には飯塚直世、加茂靖通、中西明美、横山妙子の参加を得た。(敬称略、五十音順)
1. 内業整理は下記が参加し、現地調査終了後に着手して、平成20年8月31日をもって終了した。(敬称略、五十音順)
遺物実測－荒川和哉、飯塚、市森千恵子、國津れいこ、澤村妙子、中西、中野靖之、宮崎寛子

図面トレースー市森・西村

遺物写真撮影ー木村健明、西村

1. 本書の執筆及び編集は西村が行った。
1. 現地調査及び本書作成の過程では、下記の方々から、有益な御指導、御教示を賜った。ここに記して感謝の意を表する次第である。(敬称略、団体五十音順、団体内五十音順)
森岡秀人(芦屋市教育委員会)、池峰龍彦(堺市博物館(現 堺市教育委員会))、高橋 工((財)大阪市文化財協会)・松尾信裕((財)大阪市文化財協会(現 大阪城天守閣館長))、西村 歩、市村慎太郎((財)大阪府文化財調査研究センター)・若林邦彦((財)大阪府文化財調査研究センター(現 同志社大学))、赤澤徳明(福井県教育庁埋蔵文化財調査センター)、梅木謙一((財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター)

凡　例

1. 本文中の古墳時代初頭から前期の遺物の器種分類や時期などは、原田昌則1993「II久宝寺遺跡(第1次調査)」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』(財)八尾市文化財調査研究会報告37(財)八尾市文化財調査研究会に準じる。
1. 図版に掲載した遺物のうち、植物の種の縮尺は1分の1で、それ以外の縮尺は任意である。

本文目次

第1章 はじめに.....	103
第2章 調査概要.....	105
第1節 調査の方法と経過.....	105
第2節 層序.....	105
第3節 検出遺構と出土遺物.....	111
第3章まとめ.....	148

挿図目次

第1図 調査地周辺図.....	104
第2図 1～3区地区割図.....	107
第3図 1区 北・西壁地層断面図.....	108
第4図 2区 北・西壁地層断面図.....	109
第5図 3区 北・西壁地層断面図.....	110
第6図 1区 第2面平面図.....	112
第7図 1区 S I 101平・断面図	113
第8図 1区 S I 101出土遺物実測図	114
第9図 1区 S K101～104・S K106～113出土遺物実測図	117
第10図 1区 S K114平・断面図	120
第11図 1区 S K114出土遺物実測図	121
第12図 1区 S D101出土遺物実測図	124
第13図 1区 8層出土遺物実測図	126
第14図 1区 8層・9層出土遺物実測図.....	128
第15図 2区 S K201平・断面図	129
第16図 2区 第2面平面図	130
第17図 2区 S K201出土遺物実測図	131
第18図 2区 S K202～210出土遺物実測図	136
第19図 2区 S K211・212平・断面図	137
第20図 2区 S K211・212出土遺物実測図	139
第21図 2区 S K213～215、S P201、S D201、7層、8層出土遺物実測図	140
第22図 3区 平面図	146
第23図 3区 3層、4層出土遺物実測図.....	147

表 目 次

表1	出土遺物観察表(1)	111
表2	出土遺物観察表(2)	118
表3	出土遺物観察表(3)	119
表4	出土遺物観察表(4)	122
表5	出土遺物観察表(5)	123
表6	出土遺物観察表(6)	124
表7	出土遺物観察表(7)	125
表8	出土遺物観察表(8)	127
表9	出土遺物観察表(9)	128
表10	出土遺物観察表(10)	132
表11	出土遺物観察表(11)	133
表12	出土遺物観察表(12)	135
表13	出土遺物観察表(13)	136
表14	出土遺物観察表(14)	142
表15	出土遺物観察表(15)	143
表16	出土遺物観察表(16)	144
表17	3区土坑一覧表	145
表18	出土遺物観察表(17)	147

図 版 目 次

図版1	1・2区周辺(西から) 1区機械掘削(北西から) 2区機械掘削(西から) 3区機械掘削(北東から) 2区第1面調査状況(西から)
図版2	1区第2面全景(西から) 1区S I 101(北東から)
図版3	1区S I 101調査状況(南東から) 1区S I 101K-1遺物出土状況(西から) 1区SK103遺物出土状況(北から)
図版4	1区SK113・114(南東から) 1区SK114遺物出土状況(西から) 1区SD101(南から)
図版5	2区第2面全景(西から) 2区SK201(北から) 2区SK201遺物出土状況(北から) 2区SK211(東から) 2区SK212(西から)
図版6	3区全景(北から) 3区掘削状況(南東から) 3区調査状況(南から)
図版7	1区S I 101出土遺物
図版8	1区SK101、1区SK103、1区SK104、1区SK109、1区SK112出土遺物
図版9	1区SK114出土遺物
図版10	1区SD101、1区8層、2区SK201出土遺物
図版11	2区SK205、2区SK207、2区SK211出土遺物
図版12	2区SK212、2区SK213、2区SP201、3区3層出土遺物

第1章 はじめに

久宝寺遺跡は、八尾市の西部に位置し、長瀬川と平野川に挟まれた沖積地に立地する。本遺跡は、現在の行政区画では、北久宝寺・久宝寺・西久宝寺・南久宝寺・神武町・北龜井町・龍華町・渋川町に存在し、東西約1.8km、南北約1.7kmがその範囲である。

久宝寺遺跡周辺には、東に渋川廃寺、南東に跡部遺跡、南西に龜井遺跡、北に佐堂遺跡、西に大阪市の加美遺跡が隣接している。

本遺跡の発見の契機は、1935年(昭和10年)に八尾市久宝寺五丁目で行われた道路工事中に、弥生～古墳時代の土器および丸木船の残片などが出土したことによる(吉岡1988)。しかしその後、発掘調査は実施されることなく、本遺跡の実態は十分把握できていなかった。

本遺跡における本格的な発掘調査は、本書Iに記載した通り昭和50年代に入ってからである。なかでも(財)大阪府文化財センター(以下センター)が行った近畿自動車道建設に伴う発掘調査(久宝寺遺跡北地区・久宝寺遺跡南地区・龜井北遺跡)では、弥生時代～近代までの夥しい数の遺構および遺物が発見され、集落を営んでいたことが判明した。

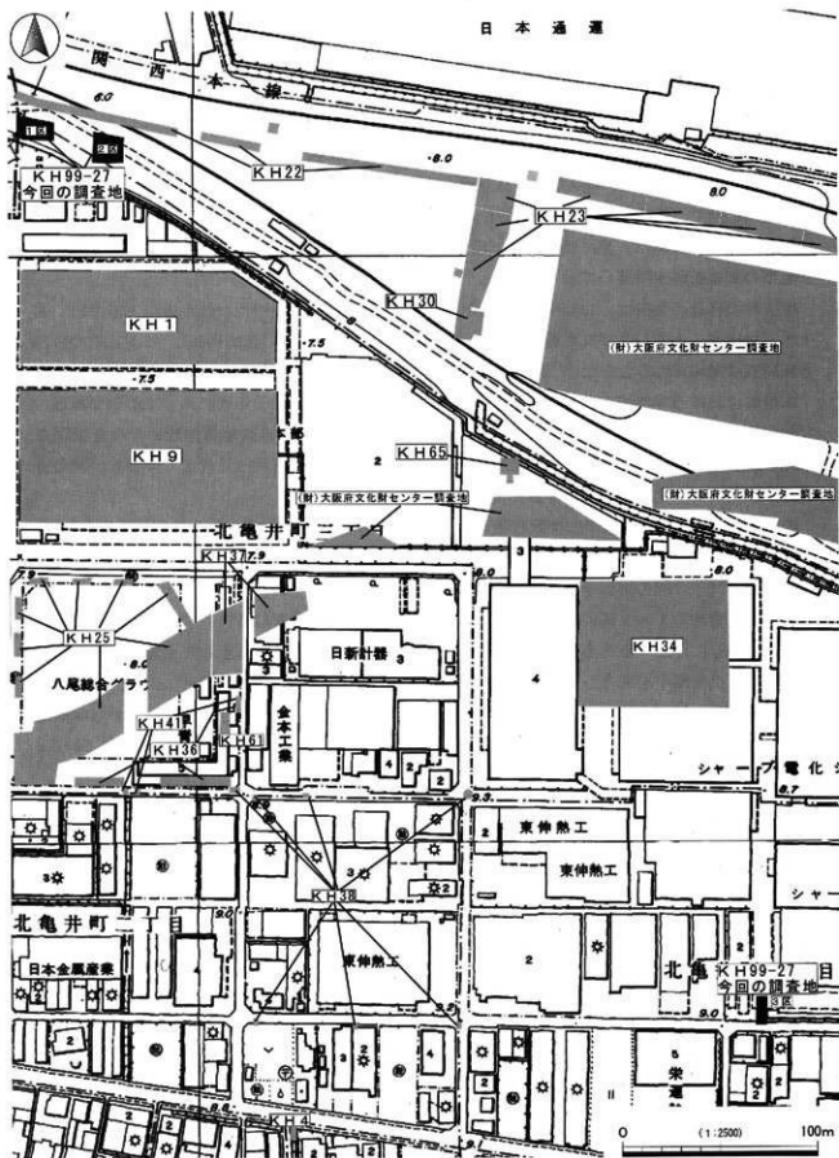
この調査以降、本遺跡内では大阪府教育委員会(以下府教委)、センター、八尾市教育委員会(以下市教委)、(財)八尾市文化財調査研究会(以下研究会)によって数多くの発掘調査が行なわれている。以下では、今回の調査地の近隣で行われた主な発掘調査について概略を紹介する。

今回の調査地の1・2区の南側に近接している研究会第1次調査(KH84-1)では、布留式古相(布留I期)に比定できる土器集積(SW-1)を検出した。ここから出土した土器は、河内地域の当該期の土器編年を考える上で重要なものとして注目されている(原田1993)。また、その南側の研究会第9次調査(KH91-9)では、布留式古相の2棟の住居が検出され、住居内からは重圓文鏡と素文鏡が出土した。また、方墳2基と壇丘長35mを測る前方後方墳1基が検出されている。前方後方墳からは、複合口縁壺形と直口壺形の2種類の壺形埴輪が出土した(成海1992)。

また、同1・2区の北側では研究会第22次調査(KH97-22)が実施され、布留式期の墓域や、布留式古相(布留I期)に比定できる北陸系の土器が出土した遺構等を検出している(原田2001)。

参考文献

- ・吉岡 哲 1988『考古編 第三章』『八尾市史(前近代)』本文編 八尾市役所
- ・寺川史郎他 1987『久宝寺北(その1～3)近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告』(財)大阪文化財センター
- ・松岡良憲他 1987『久宝寺南(その1)』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター
- ・一瀬和夫他 1987『久宝寺南(その2)』(財)大阪文化財センター
- ・服部文矩他 1986『龜井北(その1)』(財)大阪文化財センター
- ・奥 和之他 1986『龜井北(その2)』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター
- ・成海佳子 1992[13]『久宝寺遺跡第9次調査(KH91-9)』『平成3年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会
- ・原田昌則 1993『II久宝寺遺跡(第1次調査)』『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』(財)八尾市文化財調査研究会報告37 (財)八尾市文化財調査研究会
- ・原山昌則 2001『久宝寺遺跡第22次発掘調査報告書』-大阪竜華都市拠点地区区画道路2号線に伴う(財)八尾市文化財調査研究会報告68 (財)八尾市文化財調査研究会



第1図 調査地周辺図

第2章 調査概要

第1節 調査の方法と経過

今回の調査は、排水処理場・工業用水槽等の工事に伴うもので、調査地は3箇所あり、最も西側に位置している調査地を1区、以下、南東へ2区・3区と呼称した。調査は2区から行い、1区、3区の順で実施した。今回の調査地での地区割は、八尾都市計画事業大阪竜華都市拠点地区区画整理事業に伴う発掘調査を実施する際に割り付けたものを使用した。なお地区割りの詳細は研究会報告68(原田2001)を参考されたい。今回の調査地の1区はI-25-4~6 F・G地区、2区はI-25-3・4 B・C地区、3区はVI-18-8・9・10 I地区にあたる。

調査は、市教委の埋蔵文化財調査指示書に従い、現地表下約2.0mまでを機械で掘削し、以下0.5mの厚みの地層については人力で掘削を行った。ただし、3区は周辺の調査結果(市教委90-398)から、調査の対象面が現地表下1.4~1.9mの範囲にあると予想されたため、機械掘削は現地表下約1.4mまでとし、以下約0.5mの厚みの地層を人力により掘削し、調査を実施した。

調査の結果、1・2区の第1面では平安時代頃に相当する地層を検出したが、遺構の検出および遺物の出土はなかった。第2面では古墳時代初頭～前期の遺構を検出した。また、3区の5層上面では古墳時代前期に相当する遺構を検出した。遺物の出土量はコンテナ(縦0.6m×横0.4m×深さ0.2m)15箱である。

参考文献

- ・原田昌則 2001『久宝寺遺跡第22次発掘調査報告書』-大阪竜華都市拠点地区区画道路2号線に伴う-(財)八尾市文化財調査研究会報告68(財)八尾市文化財調査研究会
- ・沿 純 1991「21. 久宝寺遺跡(90?398)の調査」『八尾市内遺跡平成2年度発掘調査報告書1』八尾市文化財調査報告22 八尾市 教育委員会

第2節 層序

1区

- | | |
|------|---|
| 0層 | 盛土。現地表面の標高はT.P.+7.9m前後を測る。層厚約1.6m。 |
| 1層 | 10Y5/1灰色粗粒砂混粘土(シルトのブロック混入、鉄分含む)。層厚0.1~0.2m。 |
| 2層 | 7.5Y4/1灰色細粒砂混粘土。層厚0.1~0.2m。 |
| 3-1層 | 10YR6/1褐色灰色粗粒シルトと10YR7/1灰白色細粒シルトのラミナ。 |
| 3-2層 | 10YR6/1褐色灰色細粒シルトと微粒砂のラミナ。 |
| 3-3層 | 10YR4/3灰褐色粗粒シルト(粘性が強い)。 |
| 3-4層 | 5BG5/1青灰色~10YR7/8黄橙色細粒シルト~細粒砂。層厚0.1~0.2m。
3-1層~3-4層は平安時代頃の流水堆積である。 |
| 4層 | 5B5/1青灰色中粒シルト混粘土(細砂のブロック混入)層厚0.1m。 |
| 5層 | 5PB4/1暗青灰色粘土。(植物遺体多量に含む)層厚0.05m。 |
| 6層 | 5P3/1暗紫灰色粘土。(カルシウム粒を含む)層厚0.2m。上面は第1面である。平安時代頃に比定できる地層で、上面の標高はT.P.+5.85m前後を測る。 |

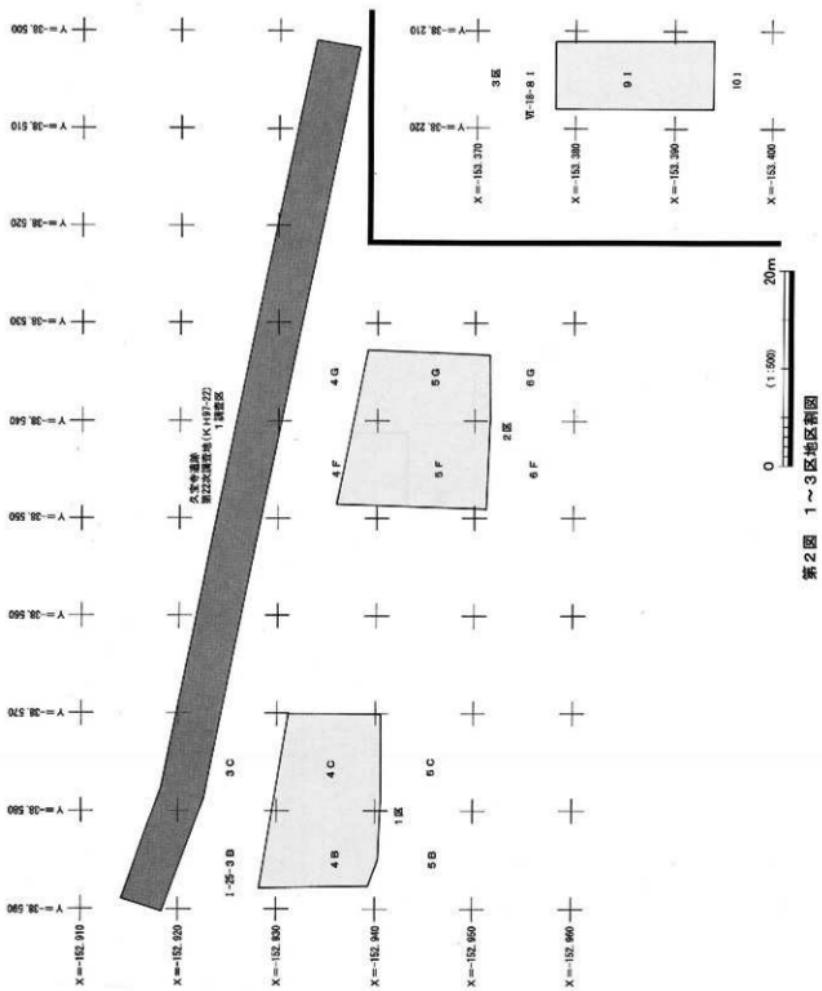
- 7層 5B5/1青灰色粘土。層厚0.1～0.2m。
- 8層 10BG5/1青灰色粗粒シルト混粘土。層厚0.2～0.4m。層の上部は人為的に攪拌をうけ土壤化している。上面は第2面で、古墳時代初頭～前期（庄内の新相～布留の古相）の遺構を検出した。上面の標高はT.P.-5.5m前後を測る。
- 9層 5BG5/1青灰色粗粒シルト。層厚0.2m以上。古墳時代初頭以前の流水堆積である。

2区

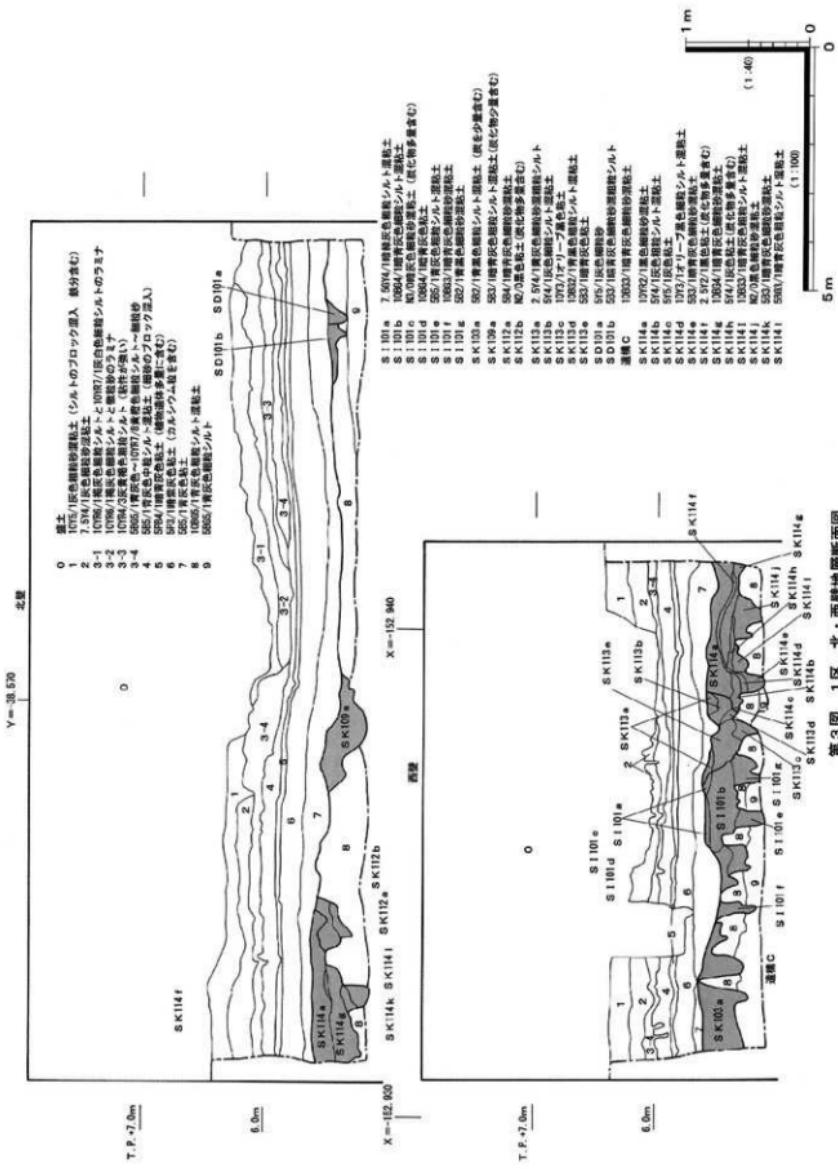
- 0層 盛土。現地表面の標高はT.P.+7.9m前後である。層厚1.3～2.1m。
- 1層 10Y5/1灰色粗粒砂混粘土。（シルトのブロック混入、鉄分含む）層厚0.1～0.2m。
- 2層 7.5Y4/1灰色細粒砂混粘土。層厚0.1m。
- 3層 5BG5/1青灰色～10YR7/8黄橙色細粒シルト～細粒砂。層厚0.3～0.6m。平安時代の流水堆積である。
- 4層 5B5/1青灰色中粒シルト混粘土。（細粒砂のブロック混入）層厚0.1m。
- 5層 5PB4/1暗青灰色粘土。（植物遺体多量に含む）層厚0.1m。
- 6層 5P3/1暗紫灰色粘土。（炭酸カルシウム含む）層厚0.2m。上面は第1面である。平安時代頃に比定できる地層である。上面の標高はT.P.+5.8m前後を測る。
- 7層 5B5/1青灰色粘土。層厚0.1～0.2m。
- 8層 10BG5/1青灰色粗粒シルト混粘土。層厚0.3m。層の上部は土壤化している。上面は第2面で古墳時代初頭～前期（庄内の新相から布留の古相）の遺構を検出した。上面の標高はT.P.+5.5m前後を測る。
- 9層 5BG5/1青灰色粗粒シルト。層厚0.17m以上。古墳時代初頭以前の流水堆積である。

3区

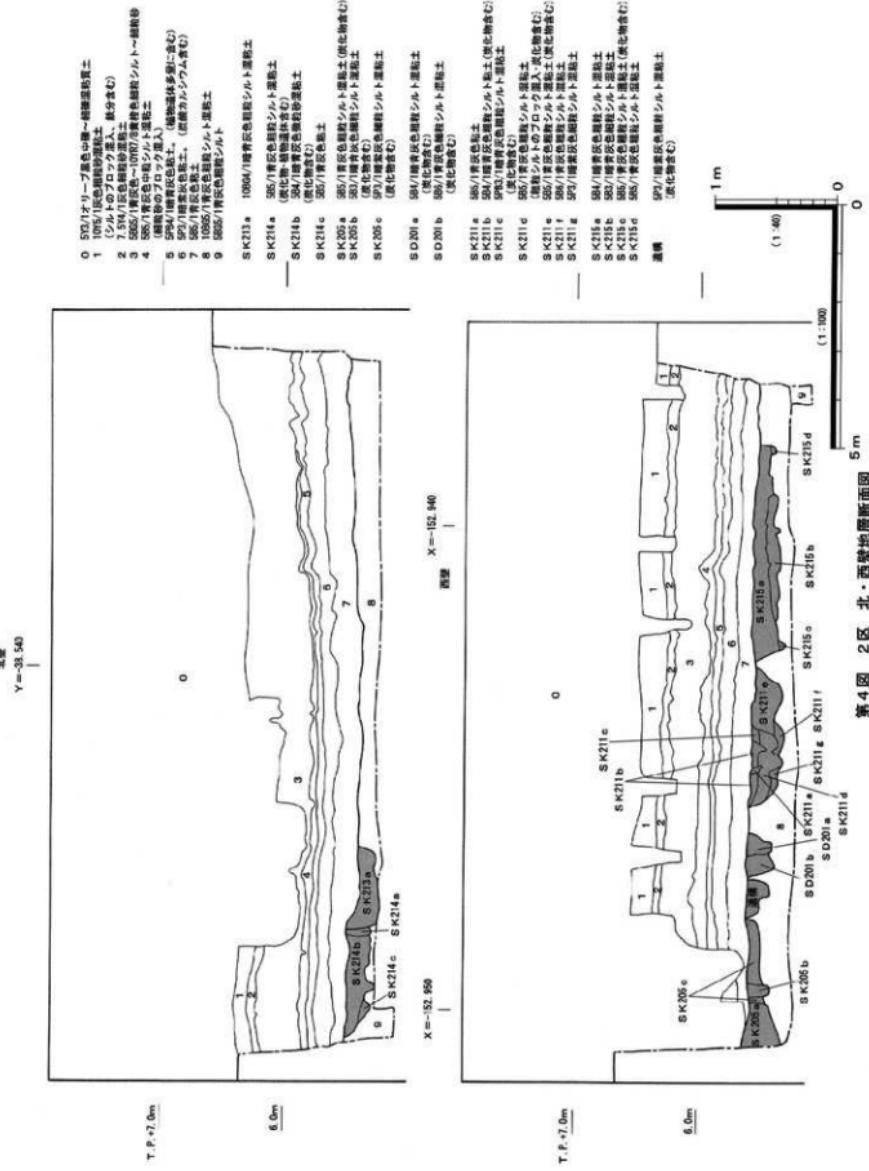
- 0層 盛土。現地表面の標高はT.P.+8.7m前後である。層厚1.0～1.7m。工場を建設する際に整地した土である。
- 1層 5Y5/1灰色細粒砂と粗粒砂のラミナ。層厚0.4m。平安時代頃に比定できるの流水堆積である。土師器の破片が極少量出土した。
- 2層 10BG4/1暗青灰色微粒シルトと粗粒シルトのラミナ。層厚0.15～0.2m。
- 3層 10YR3/1黒褐色粘土。層厚0.1～0.2m。
- 4層 5Y2/1黒色粘土。層厚0.1～0.2m。
- 5層 5B4/1暗青灰色細粒シルト混粘土。層厚0.1m。上面で古墳時代前期に相当する遺構を検出した。上面の標高はT.P.+6.9m前後を測る。
- 6層 5BG5/1青灰色細粒砂～粗粒シルト。層厚0.07m以上。



第2图 1~3区地区剖面

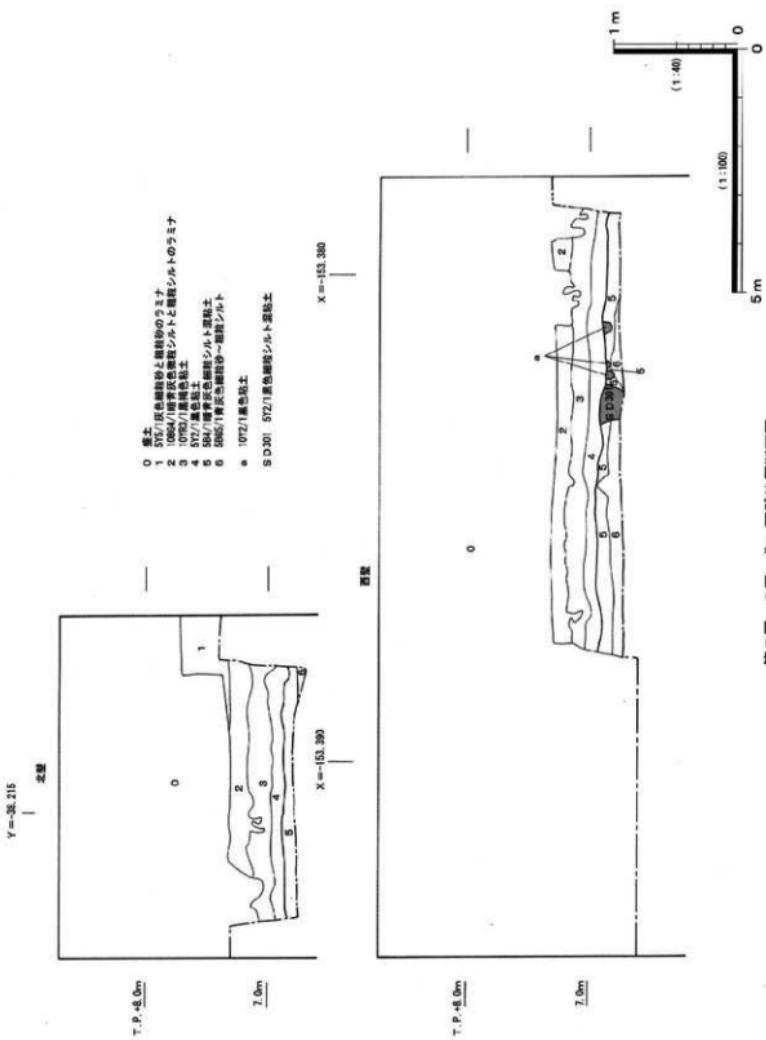


第3図 1区 北・西壁地層断面図



109

第5図 3区 北・西壁地層断面図



第3節 検出遺構と出土遺物

1区

第1面

6層上面(T.P.+5.85m前後)で調査を行ったが、遺構の検出および遺物の出土はなかった。

第2面

8層上面(T.P.+5.5m前後)で調査を行い、古墳時代初頭～前期の堅穴住居1棟(S I 101)、土坑14基(S K 101～114)、溝1条(S D 101)を検出した。

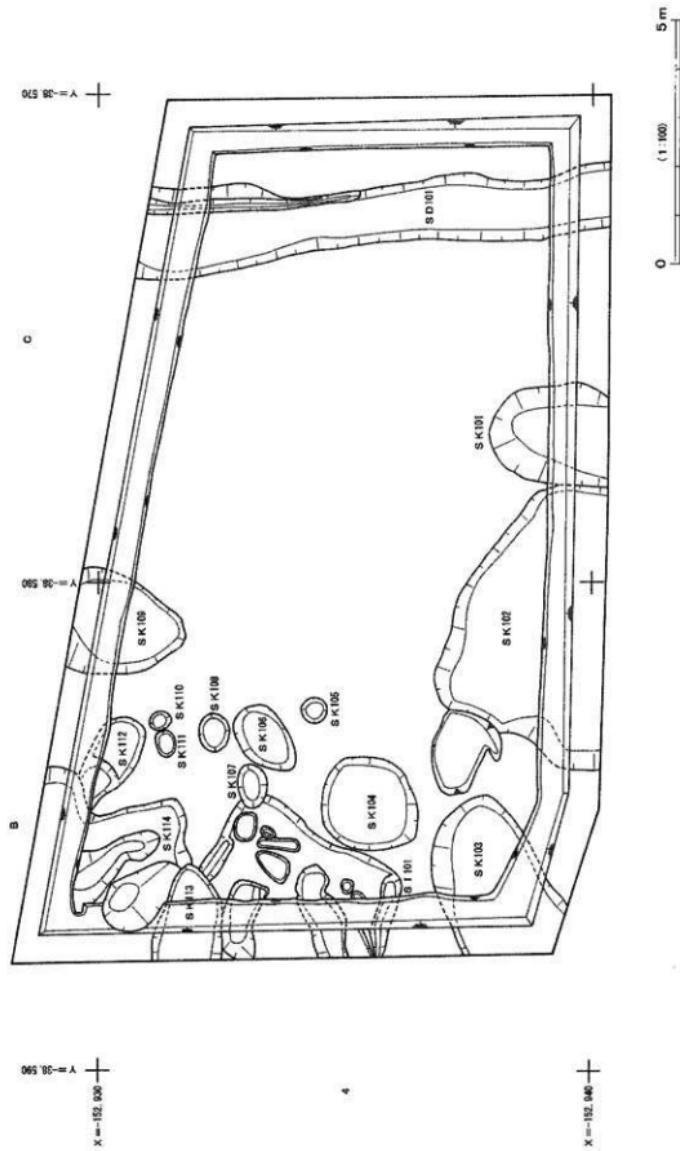
S I 101

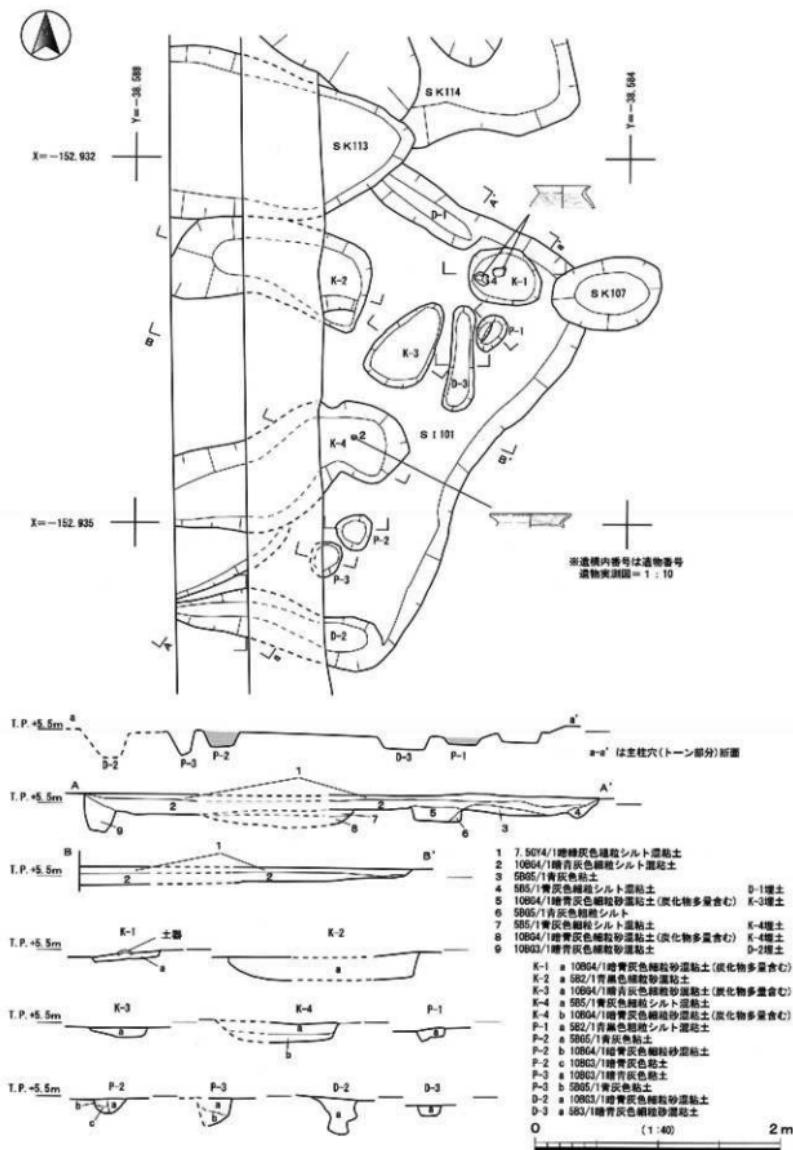
I-25-4B地区で検出した。S K 107・S K 113に切られる。平面形状は隅丸方形になると思われ、東壁での長さは約4.0mで、深さ(床面から検出面までの高さ)約0.25mを測る。埋土は1層7.5GY4/1暗緑灰色粗粒シルト混粘土、2層10BG4/1暗青灰色細粒シルト混粘土、3層5BG5/1青灰色粘土である。3層は床面に貼り付けた土で、住居の中央から北側の壁溝寄りに広がっている。1層と2層は住居が廃絶した後の堆積である。南北軸を基準にすると主軸はN-50°-Wである。北側と南側で壁溝(D-1・D-2)を検出したが、両方とも途中で途切れている。床面では土坑を4基(K-1～K-4)と小穴3個(P-1～P-3)を検出した。柱穴と考えられるものはP-1とP-2で、柱間は1.9mである。P-3内には、多量の炭や灰が混じっていることから、炉跡と考えられる。このほか溝状に窪んでいる遺構(D-3)を検出した。

表1 出土遺物観察表(1)

遺物 番号	遺構 番号	器種	法量 (cm)	形態・調整等	色調	胎土	焼成	備考
1 7	S I 101	古式土師器 壺	口径16.2	口縁部は頸部から緩やかに外反する。縁部は上下に拡張し面を形成する。口縁部の内面はツミガキ、外面はハケナダを施す。内面には塗が付着している。	内面10YR3/1黒褐色 外面10YR5/6黄褐色	1～3mmの良好 砂粒含む。		
2	S I 101	古式土師器 壺	口径15.9	口縁部は外反する。縁部は上方へつまみ出し、面を形成する。口内面10YR5/2灰黃褐色の内面はハケナダ、外面はヨコナデを施す。体部の内面はヘラケズリを施す。口縁部の外外面には塗が付着している。	内面10YR5/2灰黃褐色 外面10YR3/1黒褐色	1～3mmの良好 砂粒含む。 (角閃石を多く含む生陶 西龍虎)		
3	S I 101	古式土師器 壺		口縁部は「く」の字に黒面する。口縁部の内面はユビナデ、外面はタキのちヨコナデを施す。体部の内面はヘラケズリ、外面は左上上がりのハケナダを施す。体部上位はタタキのちヨコナデを施す。体部の外外面には塗が付着している。	内面10YR6/2灰黃褐色 外面10YR4/2灰黃褐色	1～3mmの良好 砂粒含む。 (角閃石を多く含む生陶 西龍虎)		
4	S I 101	古式土師器 壺	口径11.5	口縁部は外反する。口縁部の内外面はヨコナデを施す。体部の内面はヘラケズリ、外面は左上上がりのハケナダを施す。	内外面10YR8/2灰白色	1～4mmの良好 砂粒含む。		
5 7	S I 101	古式土師器 大型鉢	口径29.5	外反し底を持ち、さらに外反する口縁部で、端部は尖りぎみに丸く終わる。口縁部の内面はユビナデ、外面は横方向の擬円線文(4周/1cm)を施す。体部の内面はヘラケズリ、外表面は左上がりと横一部5YR6/6橙色方向のハケナダを施す。上位にハケ状工具による刺突文?を施す。口縁部と体部外下面上位に朱?を塗る。口縁部の外側には部分的に黒斑がある。	内外面10YR6/4に ない黄褐色 一部5YR6/6橙色	1～5mmの良好 砂粒含む。		北陸系
W1 7	S I 101	桃?種	長さ1.8 厚さ1.7 厚み1.3 端が尖る倒卵形である。		N2/0黒色			圓版7 に実物 大写真 を掲載
S 1 7	S I 101	叩き石?	長さ8.0 幅6.1 厚さ4.7 彫り書き道具として使用したか?叩いた痕跡が残っている。一部に黒く焦げた跡がある。		5YR6/1紫灰色			

第6圖 1區 第2面平面圖





第7図 1区 S I 101 平・断面図